

平成 25 年度「全国学力・学習状況調査」
長野県の結果分析報告書について

教学指導課

平成 25 年 11 月 1 日に長野県「全国学力・学習状況調査」分析委員会(委員長 宮崎 樹夫氏) から、「平成 25 年度「全国学力・学習状況調査」 長野県の結果分析報告書」が別添のとおり提出されました。

平成 25 年度 「全国学力・学習状況調査」

長野県の結果分析報告書



平成 25 年 11 月

長野県「全国学力・学習状況調査」分析委員会

まえがき

平成 25 年度の全国学力・学習状況調査は、きめ細かい調査として、本体調査（従来の教科に関する調査や質問紙調査）及び、経年変化調査、保護者に対する調査及び教育委員会に対する調査が行われました。本体調査は、4年ぶりに悉皆となり、4月23日（水）に、長野県ではおよそ 38,000 人の小学校 6 年生と中学校 3 年生が参加して実施されました。そして、この本体調査の結果が 8 月末に文部科学省より公表され、県や市町村、学校の結果がそれぞれに送付されました。この結果は、学力の一側面をとらえたものではありませんが、今後の取組を見定めるための貴重な事実でもあります。市町村教育委員会や各学校では、是非有効に活用していただきたいと考えます。

全国学力・学習状況調査の目的は、「義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立すること。また、児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てること」とされています。

そこで、長野県教育委員会では、悉皆による調査結果を様々な立場から分析して今後の取組につなげるために大学教員 2 名、小中学校教員 4 名、PTA 2 名の委員からなる長野県「全国学力・学習状況調査」分析委員会を設けました。また、本委員会には、参考資料作成のために、小中学校教員と教育委員会事務局の指導主事・専門主事による作業部会を設けました。委員会では、作業部会による資料等をもとに、長野県の教科に関する調査や質問紙調査の結果分析、長野県の学力に関する課題やその要因、改善の方向等を協議いたしました。

本報告書には、委員会の協議を通して明らかになった本県児童生徒の現状と指導改善に向けて今後期待される取組等をまとめました。各学校の指導改善や教育委員会の施策改善を図る上での参考にしていただければ幸甚です。そして、本県児童生徒の「確かな学力の向上」を図るために、学校、家庭、地域の連携・協働がさらに進むことを期待します。

平成 25 年 11 月

（長野県「全国学力・学習状況調査」分析委員会委員長 宮崎樹夫）

I 調査の実施状況

1 実施日 平成25年4月24日(水)

2 対象学年 小学校第6学年、特別支援学校小学部第6学年
中学校第3学年、特別支援学校中学部第3学年

3 調査の内容

(1) 教科に関する調査(国語、算数・数学)

- ・主として「知識」に関する問題

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などを中心とした出題

- ・主として「活用」に関する問題

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な問題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容を中心とした出題

(2) 質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

4 平成25年4月24日(水)に調査を実施した学校・児童生徒数

【小学校調査】

	実施学校数	児童数
全国(公立学校)	20,590校	1,121,164人
長野県(公立学校)	373校	19,782人

【中学校調査】

	実施学校数	児童数
全国(公立学校)	9,752校	1,027,458人
長野県(公立学校)	180校	18,171人

※ 対象となる児童生徒のいない小学校1校、学校行事等で実施日に実施できなかった中学校7校を除く。

II 教科に関する長野県の調査結果について

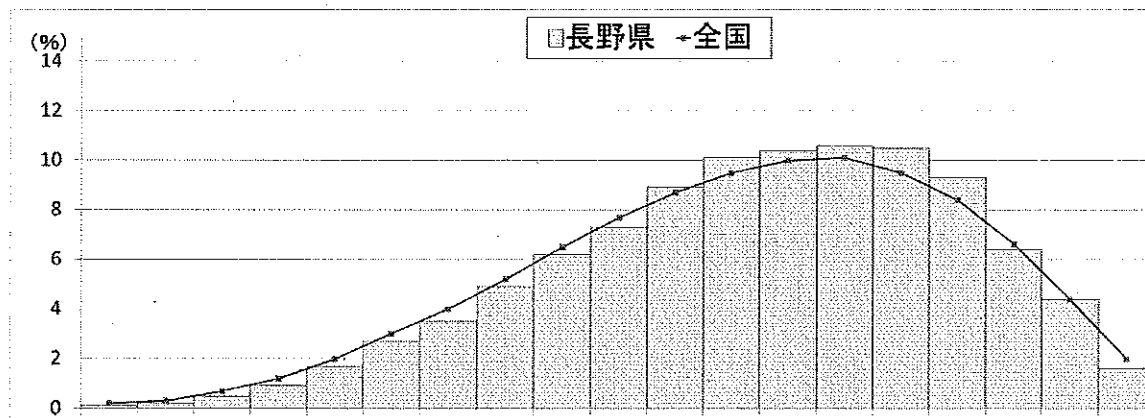
1 平成 25 年度の調査結果

【小学校調査】

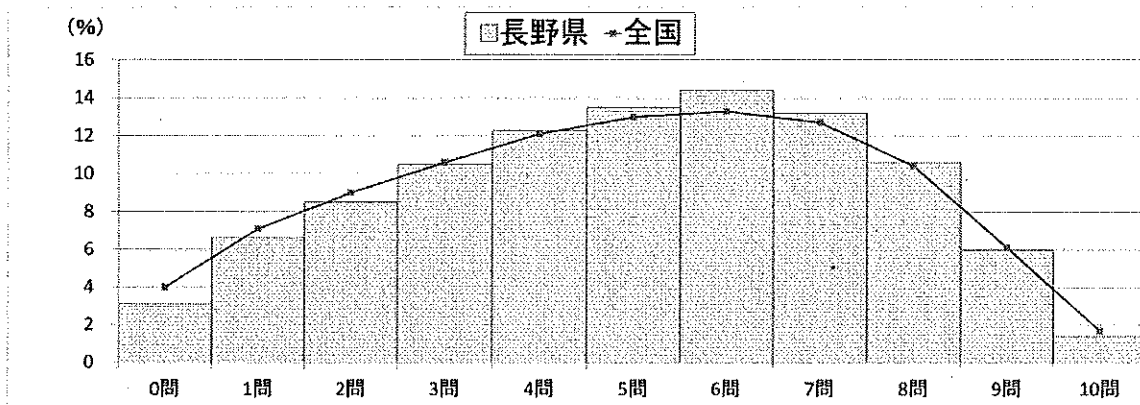
		平均正答率	平均正答数
国語A	長野県(公立)	63.7	11.5/18
	全国(公立)	62.7	11.3/18
国語B	長野県(公立)	50.3	5.0/10
	全国(公立)	49.4	4.9/10
算数A	長野県(公立)	77.8	14.8/19
	全国(公立)	77.2	14.7/19
算数B	長野県(公立)	59.5	7.7/13
	全国(公立)	58.4	7.6/13

正答数分布グラフ

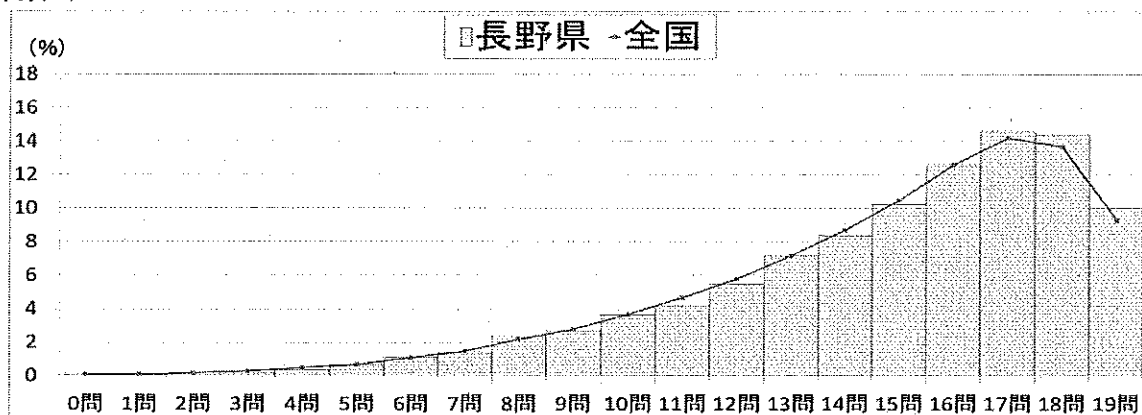
(国語A)



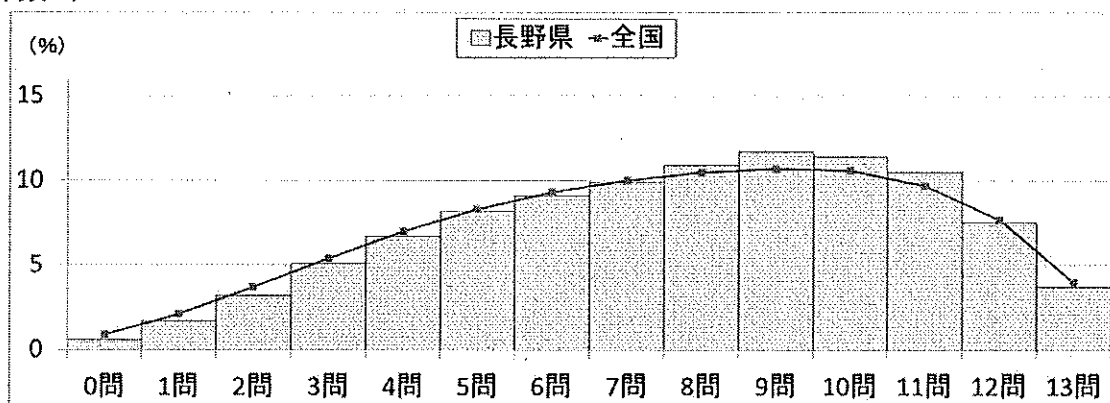
(国語B)



(算数A)



(算数B)



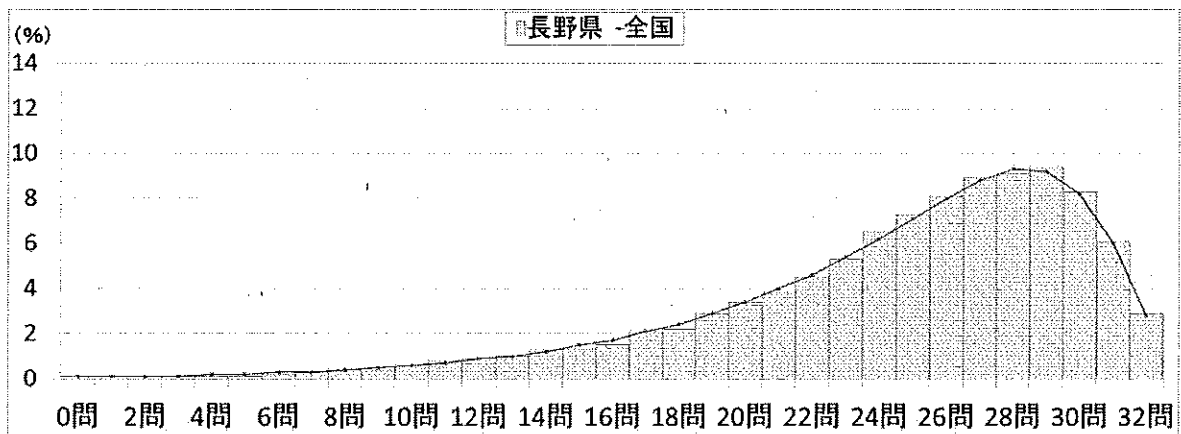
- ◇小学校では、全ての調査で全国平均を上回り、特にB問題について良好な結果となった。
- ◇国語A、Bの正答数の分布状況は、正答数の少ない児童の割合が全国よりも低く、平均正答数よりやや多い児童の割合が高い。
- ◇算数Aの正答数の分布の状況は、正答数が多い児童の割合が全国よりも高い。
- ◇算数Bの正答数の分布の状況は、正答数が少ない層は全国よりも低く、平均正答数よりも多い児童の割合が高い。
- ◆国語A、B、算数Bでは全国平均と比較すると、中位層の割合が高く、上位層の割合が低い。

【中学校調査】

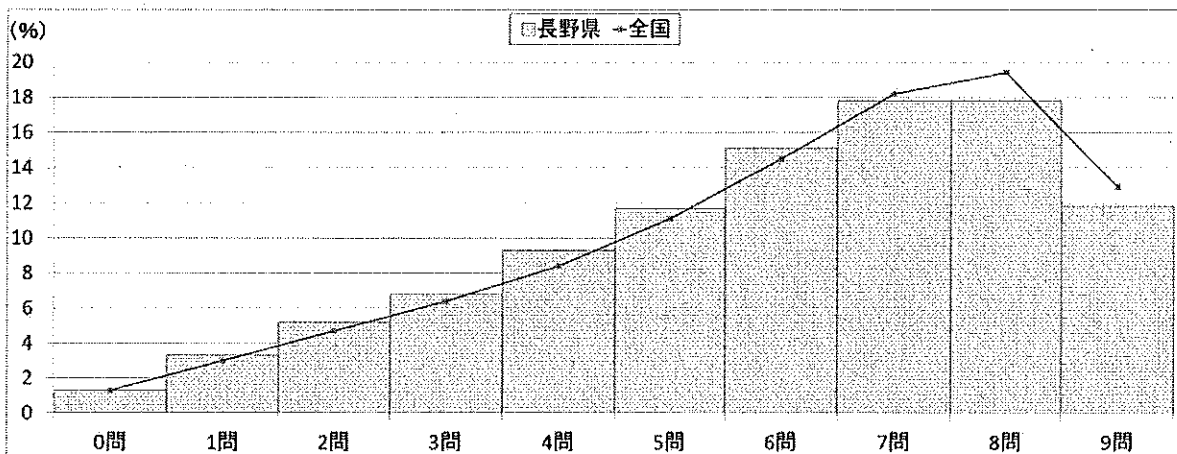
		平均正答率	平均正答数
国語A	長野県(公立)	76.8	24.6/32
	全国(公立)	76.4	24.4/32
国語B	長野県(公立)	65.9	5.9/9
	全国(公立)	67.4	6.1/9
数学A	長野県(公立)	61.9	22.3/36
	全国(公立)	63.7	22.9/36
数学B	長野県(公立)	40.2	6.4/16
	全国(公立)	41.0	6.6/16

正答数分布グラフ

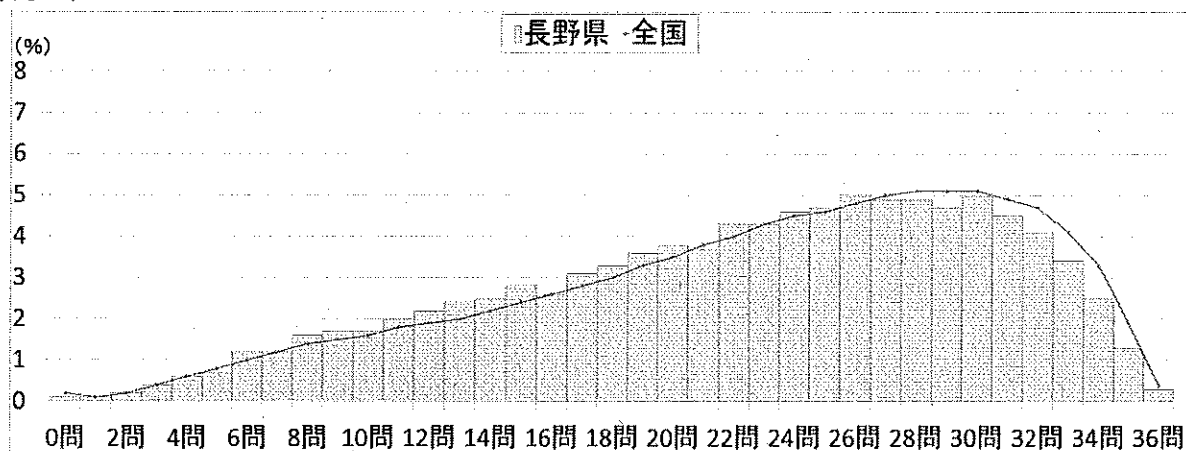
(国語A)



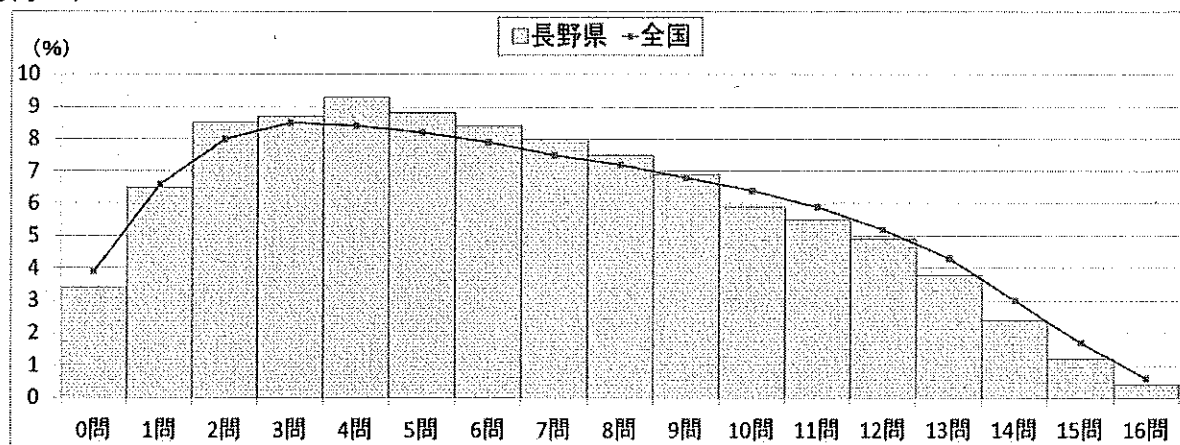
(国語B)



(数学A)



(数学B)



- ◆ 中学校では、国語Aを除き、全国平均を下回った。特に数学ではA・Bともに全国と大きな開きがある。
- ◇ 国語Aの正答数の分布状況は、全国とほぼ同様の傾向である。
- ◆ 国語Bの正答数の分布状況は、正答数の多い層の割合が全国より低い。
- ◆ 数学A、B共に、正答数の多い層の割合が全国よりも低く、全国平均正答数よりも少ない生徒の割合が高い。

2 過去6回（平成19年度～平成25年度）の調査結果

【小学校調査】

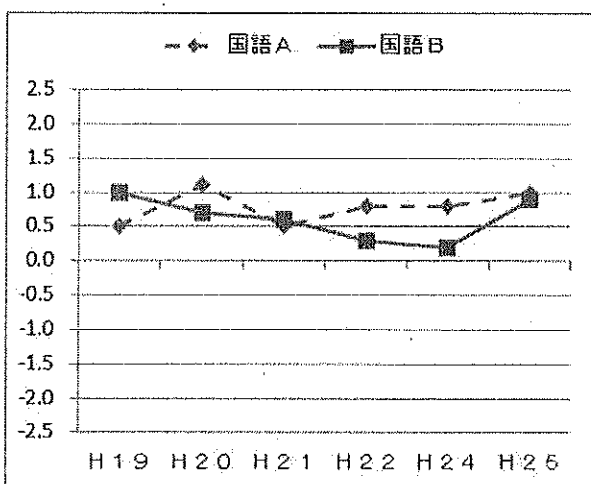
教科に関する調査の平均正答率

		国語A	国語B	算数A	算数B
H25	長野県（公立）	63.7	50.3	77.8	59.5
	全国（公立）	62.7	49.4	77.2	58.4
H24※	長野県（公立）	81.8～83.0	54.9～56.7	72.4～74.1	57.6～59.6
	全国（公立）	81.4～81.7	55.4～55.8	73.1～73.5	58.7～59.1
H22※	長野県（公立）	83.4～84.9	77.7～79.5	72.9～75.0	47.6～49.4
	全国（公立）	83.2～83.5	77.7～78.8	74.0～74.4	49.1～49.5
H21	長野県（公立）	70.4	51.1	79.5	54.4
	全国（公立）	69.9	50.5	78.7	54.8
H20	長野県（公立）	66.5	51.2	72.1	51.2
	全国（公立）	65.4	50.5	72.2	51.6
H19	長野県（公立）	82.2	63.0	83.7	63.0
	全国（公立）	81.7	62.0	82.1	63.6

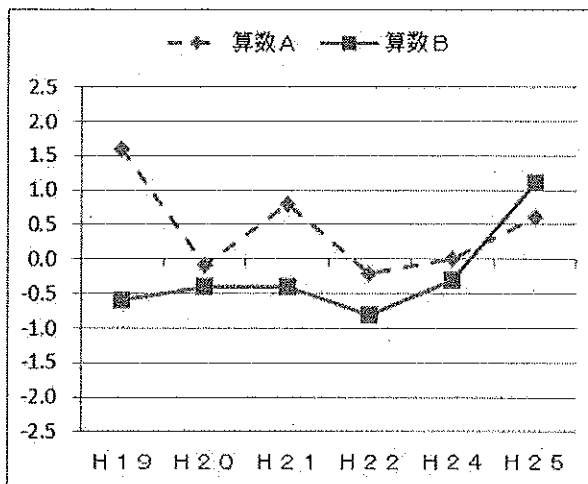
※H22、H24は、抽出調査のため、95%の確率で、全員を対象とした調査(悉皆調査)の場合の平均正答率が含まれる範囲として○～○と示してある。

全国平均との差の推移

《国語》



《算数》



※H22、H24は平均正答率の含まれる範囲の中央の値を用いている。

◇小学校国語では、A、Bともに全国平均を上回った状態で推移している。国語Bでやや全国平均との差が縮まる傾向がみられていたが、今年度は改善している。

◇小学校算数では、A、Bともに全国平均との差はプラスに転じ良好な状態に推移している。特に、算数Bは、順調な伸びがみられる。

◆小学校国語B、算数Bについては、改善傾向が見られるもの、更に指導改善を図っていく必要がある。

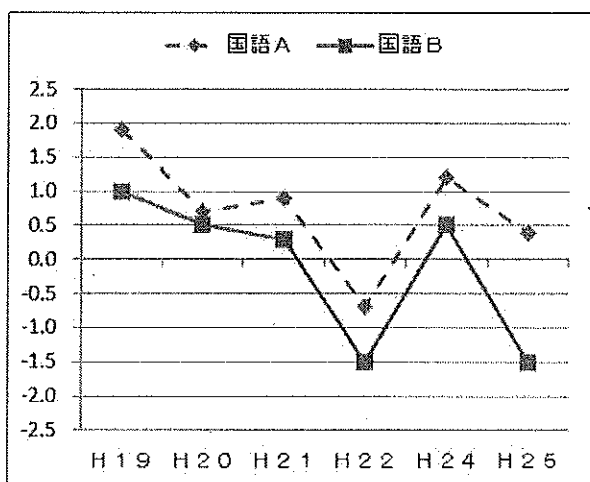
【中学校調査】

教科に関する調査の平均正答率

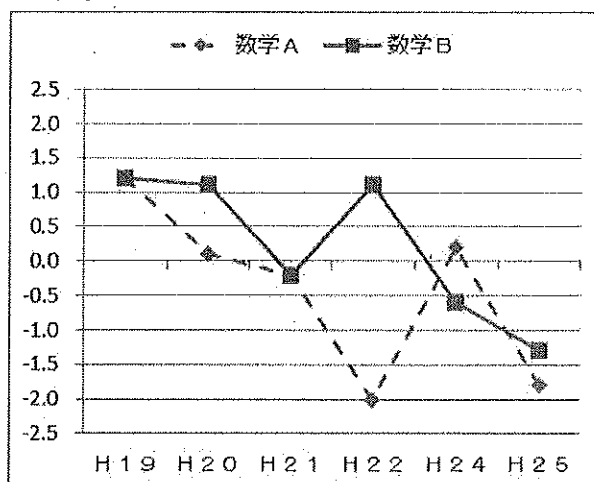
		国語A	国語B	数学A	数学B
H25	長野県（公立）	76.8	65.9	61.9	40.2
	全国（公立）	76.4	67.4	63.7	41.5
H24	長野県（公立）	75.6~77.0	62.6~65.0	61.2~63.5	47.1~50.4
	全国（公立）	75.0~75.2	63.2~63.4	62.0~62.3	49.2~49.5
H22	長野県（公立）	73.6~75.2	62.6~65.0	61.1~64.1	39.7~42.8
	全国（公立）	75.0~75.2	65.1~65.5	64.4~64.8	43.1~43.5
H21	長野県（公立）	77.9	74.8	62.5	56.7
	全国（公立）	77.0	74.5	62.7	56.9
H20	長野県（公立）	74.3	61.3	63.2	50.3
	全国（公立）	73.6	60.8	63.1	49.2
H19	長野県（公立）	83.5	73.0	73.1	61.8
	全国（公立）	81.6	72.0	71.9	60.6

全国平均との差の推移

《国語》



《数学》



- ◇中学校では、全体として下降傾向であるものの、国語Aは全国平均を上回った状態で推移している。
- ◆中学校国語A、B、数学Aでは、24年度に差がプラスに転じ改善の傾向がみられたが、本年度は再び全国との差が開いている。
- ◆中学校数学は、A、Bともに全国平均との開きが大きくなってきている。

3 平成25年度調査の各教科の設問別正答率と指導改善の方向

小学校国語

設問別集計結果

《国語A》

問題番号	1						2		3			4			5		6	7
	一(1)	一(2)	一(3)	二(1)	二(2)	二(3)	一	二	一	二(1)	二(2)	ア	イ	ウ	ア	イ	アイ	
評価	言語文化と国語の特質に関する事項						言語文化 国語の特質		言語	書く 言語	言語	書くこと			読む・言語		読む 言語	話聞 言語
国語への関心・意欲・態度														○				
話す・聞く能力																		○
書く能力										○		○	○	○				
読む能力															○	○	○	
言語についての知識・理解・技能	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○
全国正答率	98.9	79.2	64.9	72.4	46.9	53.5	71.1	86.1	36.5	23.4	83.3	72.4	71.3	44.9	61.1	71.7	47.5	43.2
本県正答率	99.2	81.0	58.5	78.7	54.4	49.4	69.0	89.9	34.0	23.2	85.5	73.6	72.9	48.4	60.6	74.9	48.8	45.3
全国正答率 と本県正答率との 差を表すグラフ																		

《国語B》

問題番号	1			2			3			
	一	二	三	一	二	三	一	二	三	四
評価	話すこと聞くこと			話聞 書く	書く 言語	書くこと	読む			
国語への関心・意欲・態度			○			○				
話す・聞く能力	○	○	○							
書く能力			○	○	○	○				
読む能力							○	○	○	○
言語についての知識・理解・技能				○						
全国正答率	78.8	48.5	67.2	63.8	26.2	17.8	49.7	45.3	44.6	51.9
本県正答率	80.1	48.3	71.3	64.3	22.1	18.2	50.9	47.0	47.2	53.6
全国正答率 と本県正答率との 差を表すグラフ										

全国正答率を上回る主な問

- ◇漢字を書く(魚を空く) [A1二(1)]
(バスがていしゃした)
[A1二(2)]
- ◇話し手の意図を捉え、助言についての説明を書く [B1三]

全国正答率を下回る主な問

- ◇漢字を読む(めずらしい植物を採集する)
[A1一(3)]
- ◇漢字を書く(委員会をもうける) [A1二(3)]
- ◇花火師の苦勞が具体的に書かれている内容を引用して書く [B2二]

指導改善の方向

☆目的や意図に応じて、複数の内容を含む文について、主語と述語との関係や接続語の役割を分析的に捉えたり関連付けたりしながら、自分の考えを書く学習を大切にしましょう。

☆相手の立場や状況に合わせてながら、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる学習を大切にしましょう。

領域ごとの課題と指導改善のポイント

話すこと・聞くこと

○話し手の意図を捉えながら聞き、適切に助言をすることに課題がみられます。

→話し手の意図を考えながら聞き、相手の立場や状況に合わせて、知識や情報を確認したり、取組の良さを認めたり、新たな情報を提供したりする学習を大切にしましょう。

書くこと

○目的に応じて資料を読み、必要な情報を取り出し、分かったことを条件に合わせて文章に書くことに課題がみられます。

→学年の段階に応じて主語と述語の関係や指示語と接続語の役割、文と文章の構成の理解などを重点的に指導する学習を大切にしましょう。

○目的や意図に応じ、文と文のつながりを考えながら必要な内容を適切に引用したり、複数の内容を関連付けたりしながら、自分の考えを書くことに課題がみられます。

→自分の課題について調べ、意見を述べた文章や活動を報告する文章を編集する学習や、読み手に伝えたいことが分かりやすくするために、必要な内容を引用したり関係付けたりする学習を大切にしましょう。

読むこと

○俳句の表現の特徴を押さえながら、その情景を捉えることに課題がみられます。

→音数から季節や風情、作品に込められた作者の思いなどを想像したり、音数が生み出すリズムから言葉の美しい響きを感じ取ったりしながら、文語の調子に親しむ学習を大切にしましょう。

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

○漢字の書きの定着状況にやや課題が見られます。

→学年別漢字配当表に示されている漢字は、繰り返し練習するだけでなく、様々な場面で実際に使用して漢字の意味を理解したり、同音異義や同訓異義の漢字に注意したりする学習を大切にしましょう。

指導改善の方向

☆問題の場面から必要な情報を整理し、条件に合うかどうかを表に整理するなどして表現する活動を取り入れましょう。その際に、整理の仕方を言葉で表現する活動を取り入れることも考えられます。

☆判断の理由や事実が成り立つ理由を説明する際に、根拠となる事柄をもれなく示すことができるよう、解決方法の見通しを言葉や図を用いて表現する活動を取り入れましょう。

領域ごとの課題と指導改善のポイント

数と計算

○四捨五入で数を適切に処理する方法についての理解に課題がみられます。

→概数を的確に用いることができるように、数直線を用いて具体的に理解できるような活動を取り入れましょう。

量と計算

○単位量当たりの大きさを求める除法の式と商の意味を理解すること、単位量当たりの大きさなどに着目して、二つの数量の関係の求め方を式や言葉を用いて記述することに課題がみられます。

→式の表す意味を図に表したり、求めた結果の意味を考えたりして、数値の意味を具体的に考える活動を取り入れましょう。

図形

○円柱について、底面の長さや展開図の側面の辺の長さなどが対応していることを理解することに課題がみられます。

→身の回りから平面図形や立体図形を見だし、図形の性質を基に考察する活動を取り入れましょう。

数量関係

○割合が同じで基準量が増えているときの比較量の大小を判断し、その判断の理由を言葉と数や式を用いて記述することに課題がみられます。

→基準量、比較量、割合の関係を図に表したり、□を用いた式で表したりして数量の関係を捉える活動を取り入れましょう。

中学校国語

設問別集計結果

《国語A》

問題番号	1		2		3		4		5		6		7		
	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	
評価	話す・聞く		読む		書く		読む		読む		話す・聞く		書く		
国語への関心・意欲・態度															
話す・聞く能力	○	○									○	○			
書く能力					○	○								○	○
読む能力			○	○			○	○	○	○					
言語についての知識・理解・技能															
全国正答率	90.5	54.7	76.0	86.7	58.1	48.8	84.8	70.1	86.8	75.6	84.6	80.7	73.6	77.5	
本県正答率	91.8	54.3	76.4	84.7	61.0	47.1	83.0	69.3	85.9	73.6	84.2	78.6	72.3	75.9	
全国正答率と本県正答率との差を表すグラフ															

問題番号	8																		
	-1	-2	-3	二1	二2	二3	三ア	三イ	三ウ	三エ	三オ	三カ	四	五1	五2	六	七1	七2	
評価	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項																		
国語への関心・意欲・態度																			
話す・聞く能力																			
書く能力																			
読む能力																			
言語についての知識・理解・技能	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
全国正答率	87.5	59.3	66.7	93.2	70.6	89.4	46.6	62.7	96.3	84.8	81.3	90.2	96.4	69.8	91.3	73.4	52.4	83.4	
本県正答率	89.5	66.7	71.6	94.2	69.5	93.7	45.9	63.8	96.1	84.1	85.4	91.2	96.7	69.1	92.2	71.4	56.7	82.3	
全国正答率と本県正答率との差を表すグラフ																			

《国語B》

問題番号	1			2			3		
	一	二	三	一	二	三	一	二	三
評価	読む			書く			読む		
国語への関心・意欲・態度			○			○			○
話す・聞く能力									
書く能力			○			○			○
読む能力	○	○	○	○	○	○	○	○	○
言語についての知識・理解・技能									○
全国正答率	71.7	62.7	57.9	77.5	75.6	65.7	61.0	70.2	64.6
本県正答率	69.6	59.4	55.4	76.6	74.8	64.5	58.8	69.8	64.6
全国正答率と本県正答率との差を表すグラフ									

全国正答率を上回る主な問題

- ◇漢字を書く(大きなキゴウをもつ) [A8-2]
(おやつをキントウに分け合う) [A8-3]
- ◇漢字を読む(山々が連なる) [A8二3]
- ◇比喩を用いた表現(「かすみ」や「雲」のように見えたもの)を本文中から抜き出す [A8七1]

全国正答率を下回る主な問題

- ◇図と文章との関係を捉え図が示す内容を説明したものとして適切なものを選択する [B1二]

指導改善の方向

☆課題解決的な言語活動を位置付け、生徒自身が単元全体の学習について、見通しをもって取り組む中で、どこに着目しどう考えるかを明確にして、言葉の働きや意味を比較・検討し、根拠を明確にした理由付けをして意見を述べ合う活動を取り入れましょう。

領域ごとの課題と指導改善のポイント

話すこと・聞くこと

○話し合いの中で、個々の発言内容を整理しながら、話し合いの方向を捉えて司会の役割を果たすことに課題がみられます。

→話し合いの目的に応じて、司会の役割を意識できるように、進行の仕方や参加者への声の掛け方など、司会の果たす役割を考えさせる学習を大切にしましょう。

書くこと

○文の接続に注意し、伝えたい事柄が明確になるように情報を適切に取り上げて書くことに課題がみられます。

→課題を解決する具体的な手順を考え、それについて検討し合う場面を設定し、情報を収集する複数の手段を用いて、それぞれの手段の特徴について考える学習を大切にしましょう。

○根拠を明確にして、自分の考えを書くことに課題がみられます。

→新聞や白書などからモデルとなる文章を示し、情報の取り上げ方や書き方の工夫点を確認した上で、自分の表現に生かして書く学習を大切にしましょう。

読むこと

○文章の内容を適切に理解し、図と文章の関係を捉えることや文章の構成や表現の特徴を捉え、情報を関連させて読むことに課題がみられます。

→文章中の言葉を使って図表が果たしている役割を説明したり、文章の中に図表がある場合とない場合とを比較したりする学習を大切にしましょう。

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

○比喩を用いた表現について理解することに課題が見られます。

→古典の学習の際には、古典の文章を読みながら、比喩などの表現の技法に着目し、内容を大まかに捉える上で、自分の体験と結び付けて情景を想像したり、解説した文章を読んだりするなどの学習を大切にしましょう。

中学校数学

設問別集計結果

《数学A》

問題番号	1				2				3			4			5			6			7			8	
	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)		
評価領域	数と式												図形			図形			図形			図形			図形
技能	○	○			○	○	○		○		○	○				○							○		
知識理解			○	○				○		○			○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	
全国正答率	83.2	87.5	75.8	64.8	81.7	86.9	32.3	74.0	73.7	77.5	82.7	88.4	48.9	56.0	56.7	85.0	47.1	78.8	55.4	79.2	68.5	47.7	64.1		
本県正答率	79.5	87.0	74.6	57.7	78.9	64.2	29.1	71.1	70.3	75.1	83.2	88.3	47.1	53.7	56.7	85.6	47.1	77.3	51.9	78.4	65.5	47.9	61.8		
全国正答率と本県正答率との差を表すグラフ																									

問題番号	9	10				11		12	13	14		15	
		(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)			(1)	(2)	(1)	(2)
評価領域	関数	関数							資料の活用				
技能		○			○	○	○	○			○		○
知識理解	○		○	○				○	○			○	
全国正答率	13.8	78.9	64.7	52.5	71.0	81.9	42.4	54.3	69.0	77.4	22.8	33.1	53.8
本県正答率	12.4	77.9	63.2	52.4	71.2	80.1	41.8	51.9	66.3	75.5	23.6	30.2	51.1
全国正答率と本県正答率との差を表すグラフ													

全国正答率を上回る主な問題

- ◇1辺に5個ずつ基石を並べて正三角形の形をつくったときの、基石全部の個数を求める[B5(1)]
- ◇基石全部の個数を求める式 $3(n-1)$ に対応する囲み方を選ぶ[B6(2)]

全国正答率を下回る主な問題

- ◇東京の時刻を基準にして、東京とカイロの時差を表す[A1(4)]
- ◇五角形のある頂点における外角の大きさを求める[A6(2)]
- ◇2つの辺の長さが等しいことを、三角形の合同を利用して証明する[B4(1)]
- ◇2つの辺の長さが等しいことを証明する際に、根拠として用いる平行四辺形になるための条件を選ぶ[B4(2)]
- ◇2けたの自然数と、その数の十の位の数と一の位の数を入れかえた数の差が9の倍数になる説明を完成する[B2(1)]
- ◇2けたの自然数と、その数の十の位の数と一の位の数を入れかえた数との和について予想した事柄を表現する[B2(2)]

《数学B》

問題番号	1			2		3			4		5			6		
	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)
評価領域	関数			数と式		関数			図形		資料の活用			数と式		
考え方		○	○	○	○		○	○	○	○		○	○		○	○
技能	○													○		
知識・理解						○					○					
全国正答率	53.7	31.7	23.7	37.3	38.0	72.4	31.7	26.9	32.4	57.1	69.0	24.8	32.7	52.5	56.6	24.1
本県正答率	50.5	28.7	21.5	32.1	34.3	73.9	28.9	25.9	28.8	52.9	70.8	23.8	30.4	55.9	60.1	25.4
全国正答率と本県正答率との差を表すグラフ																

指導改善の方向

- ☆基礎的・基本的な知識・技能に関する問題を解決するにあたっては、解決の方法を考え、説明する活動を取り入れましょう。
- ☆日常の事象を、理想化や単純化して考察したり、問題を解決する活動や判断の理由や事実が成り立つ理由を説明したりする際に、根拠がより適切になるよう修正する活動を取り入れましょう。

領域ごとの課題と指導改善のポイント

数と式

- 実生活の場面において、ある基準に対して反対の方向や性質をもつ数量が、正の数と負の数で表されることの理解に課題がみられます。
 - 正の数と負の数の必要性和意味を理解するために、実生活の様々な場面に結び付けて指導する機会をもちましょう。
- 数量の関係や法則などを文字式で表すことに課題がみられます。
 - 具体的な数に置き換えて考える活動や、言葉の式を用いて関係を表すなどの活動を取り入れましょう。

図形

- 証明の方針を立てることや、方針に基づいて証明することに課題がみられます。
 - 与えられた条件を整理したり、着目すべき性質を見いだしたりして、証明の方針を立てる活動を取り入れましょう。

関数

- 関数の意味を理解することに課題がみられます。
 - 既習の数や図形の性質を、関数として見る機会を設けましょう。
- 日常的な事象を理想化・単純化してその特徴を捉えることに課題がみられます。
 - 具体的な事象における数量の関係を表などに表し、特徴をとらえる機会を設けましょう。

数量関係

- 確率の意味の理解に課題がみられます。
 - 実験や操作を通して、体験的に理解できるように指導しましょう。
- 資料の傾向を捉え、事柄の特徴を数学的に説明することに課題がみられます。
 - 目的に応じて資料の整理の仕方を工夫し、視点を変えて捉えなおす活動を取り入れましょう。

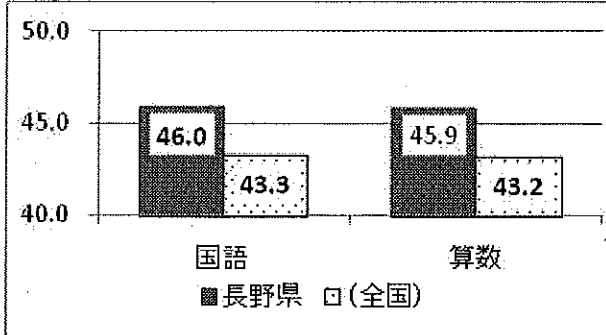
Ⅲ 質問紙調査の回答も含めた長野県の分析結果について

1 自分の考えや理由を言葉で記述して説明することに関して

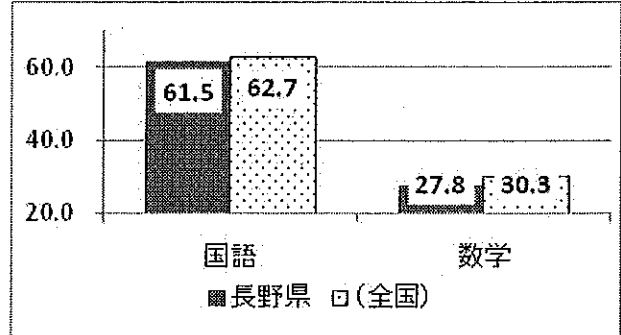
(1) 記述式問題の正答率・無解答率

本年度の調査における記述式問題の正答率は、グラフ1、2の通りである。

〔グラフ 1〕 小学校調査における記述式問題の正答率(H25)



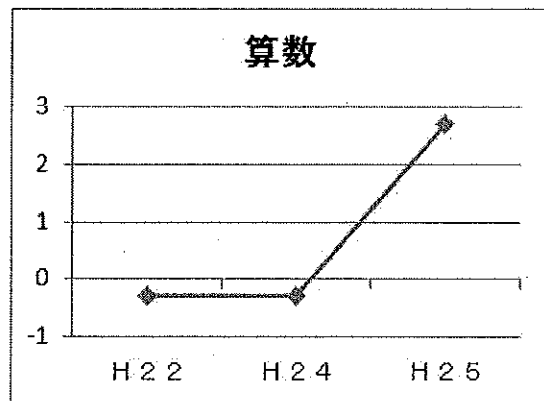
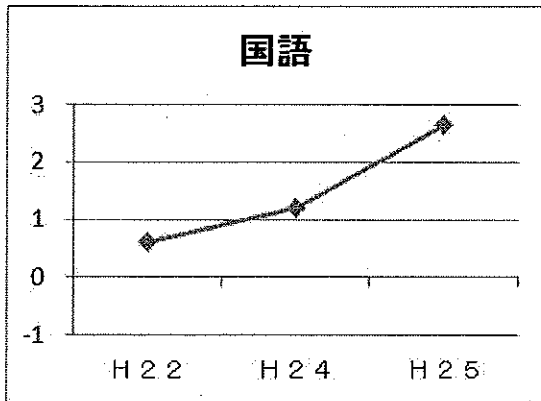
〔グラフ 2〕 中学校調査における記述式問題の正答率(H25)



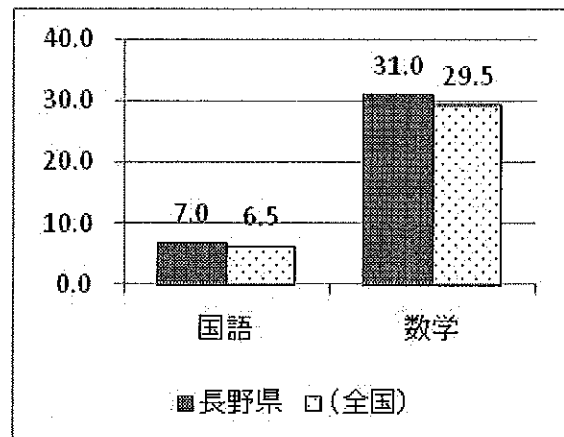
小学校の国語は46.0%、算数は45.9%であり、全国平均と比べ国語、算数ともに2.7ポイント上回っている。中学校は、国語が61.5%、数学が27.8%であり、全国平均と比べ国語が1.2ポイント、数学が2.5ポイント下回っている。

小学校について、本県の平均正答率と全国平均との差の推移をみるとグラフ3のようになり、改善傾向にあるとみられる。

〔グラフ 3〕 小学校調査における記述式問題の正答率と全国平均との差の推移



〔グラフ 4〕 中学校調査における記述式問題の無解答率(H25)



本年度課題がある結果となった中学校について、記述問題の無解答率と無解答であった問題についての質問紙の回答状況は、グラフ4から6の通りである。中学校の無解答率は、国語で7.0%、数学で31.0%である。数学については、全体の3割以上の生徒が全く手を付けていない状況である。グラフ5では、数学B[4](1)を解答しなかった理由である。「難しくて解答できなかった」生徒が67.9%、「解答しようと思わなかった」生徒が23.8%、「時間が

足りなかった」生徒が7.5%である。本県の生徒の解答しようとした割合は全国よりも高い状況であり、問題に取り組もうとする姿勢は伺える。「難しくて解答できなかった」生徒がそのとき考えたことはグラフ6の通りである。44.0%が「問題文の意味が分からなかった」32.5%が「どの条件を使えばよいか分からなかった」、17.3%が「どのように書けばよいか分からなかった」と回答している。問われていることは理解しているが、問われていることに対して、「何を用いて解決すればよいか分からない生徒」が多いことが伺える。

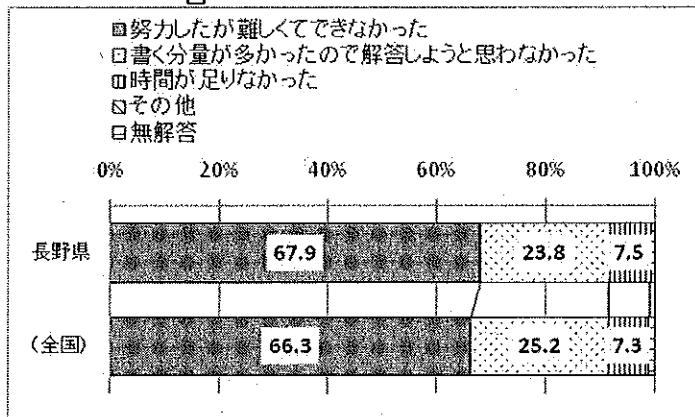
中学校では、昨年までの調査で課題であった「自分の考えや理由を言葉で記述し説明する」ことが引き続き課題である。特に、数学についてみると、説明の対象となる事柄の根拠を示すことに課題がある。

(2) 授業での話し合い活動

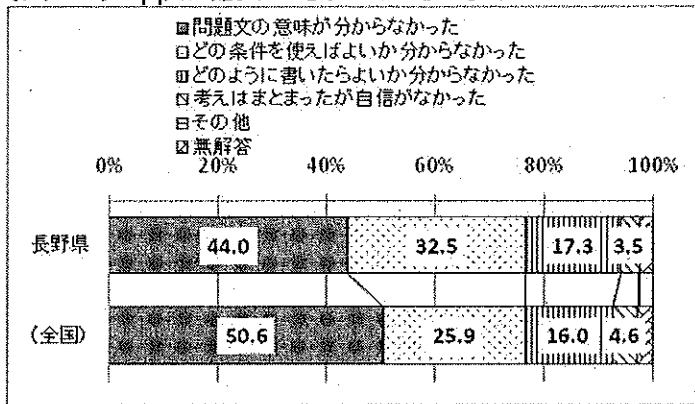
普段の授業で友達と話し合う活動の状況についてはグラフ7、8、話し合う活動と本県の児童生徒の正答率の関係はグラフ9、10の通りである。

グラフ7から小学生の肯定的な回答（よく行っている、どちらかといと行っているの合算）は、78.4%であり、全国と同程度である。グラフ8から中学生の肯定的な回答は60.3%であり、全国より4.4ポイント低い。グラフ9から「話し合う活動をよく行っている」と回答した本県の小学生の国語Aと算数Aの正答率の平均は71.7%、行っていないと回答した児童の平均は62.0%である。「話し合う活動をよく行っている」と回答した児童の国語Bと算数Bの正答率の平均は55.9%で、行っていないと答えた児童の平均は43.0%である。グラフ10から、本県中学

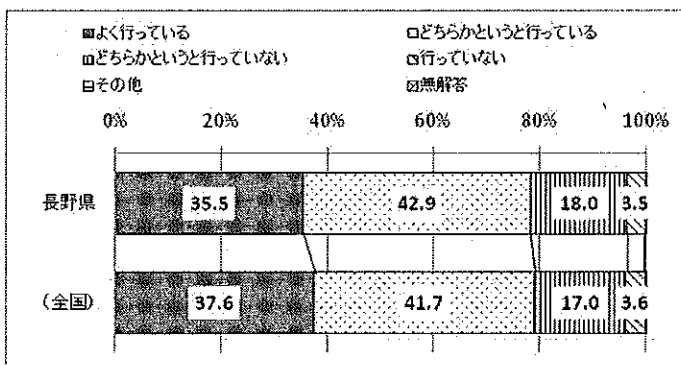
【グラフ 5】 数学B4(2)を解答しなかった理由



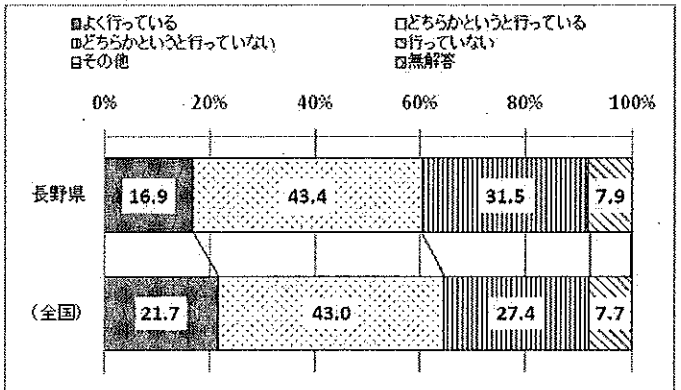
【グラフ 6】 B4(2)が難しくできなかったときに考えたこと



【グラフ 7】 授業で友達と話し合う活動(小学生)

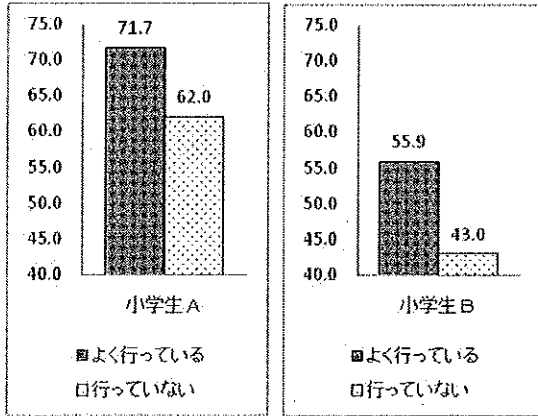


【グラフ 8】 授業で友達と話し合う活動(中学生)

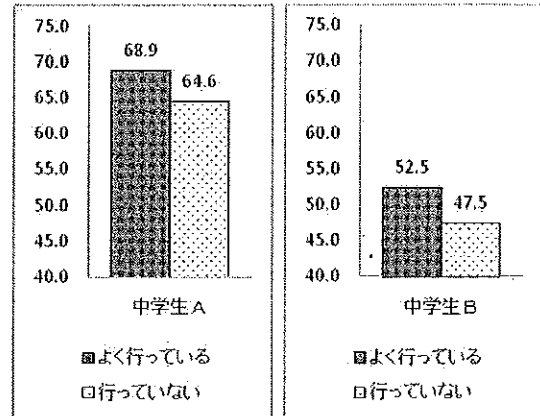


校では「話し合う活動をよく行っている」と回答した中学生の国語Aと数学Aの正答率の平均は68.9%、行っていないと回答した生徒の平均は64.6%である。よく行っていると回答した生徒の国語Bと数学Bの正答率の平均は52.5%で、行っていないと回答した生徒の正答率の平均は47.5%である。

【グラフ 9】 授業で友達と話し合う活動と A問題、B問題の正答率の相関(小学生)



【グラフ 10】 授業で友達と話し合う活動と A問題、B問題の正答率の相関(中学生)



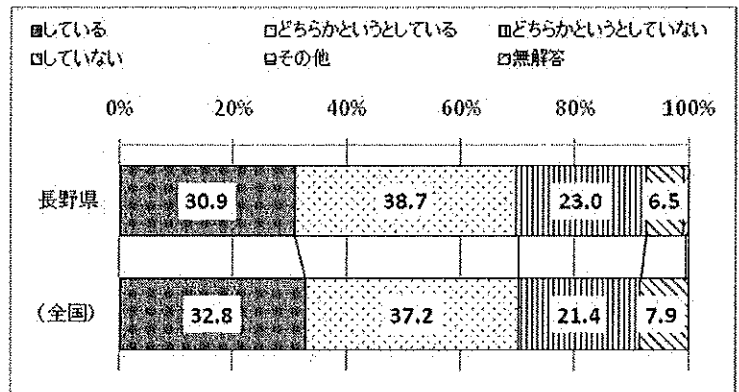
(3) 知識・技能の確実な定着について

中学校の数学の授業で公式やきまりを習うときの状況及び、その状況と正答率の関係はグラフ 11、12 の通りである。

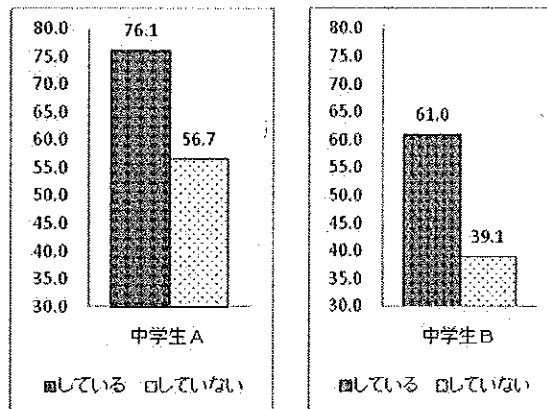
グラフ 11 から、公式やきまりを習うとき、「その根拠を理解するようにしているか」の設問に対して肯定的な回答の割合は、69.6%で、全国より 0.4 ポイント低く、平均正答率の高い秋田県より 9.9 ポイント低い状況である。

また、グラフ 12 から、「数学の公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」と回答した本県生徒の国語A、数学Aの正答率の平均は 76.1%で、していないと回答した生徒の正答率の平均は 56.7%である。国語Bと数学Bの正答率の平均は 61.0%で、していないと回答した生徒の正答率の平均は 39.1%である。

【グラフ 11】 数学の公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにする(中学生)



【グラフ 12】 数学の公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにならんと正答率の相関(中学生)



考察

記述式問題の正答率の状況から本県の児童生徒の活用する力についてみると、小学校においては学力向上の取組の成果がみえてきている。中学校では、論理的な思考力や表現力に関して、事柄が成り立つ理由を説明する際に、必要な情報を適切に選択し判断するなどして根拠を示すことに課題がみられる。

授業についてみると、本県の中学校では、生徒が互いに考えを出し合い、主体的に課題を追究していく機会が少なく、教師主導の授業が多いことが推測される。「普段の授業で友達同士で話し合う機会が多い」、「公式やきまりを学習するときはその根拠を理解するようにしている」と回答している生徒は、知識や技能を活用する力をみるB問題の正答率が高い。中学校において、一層の授業改善が求められる。

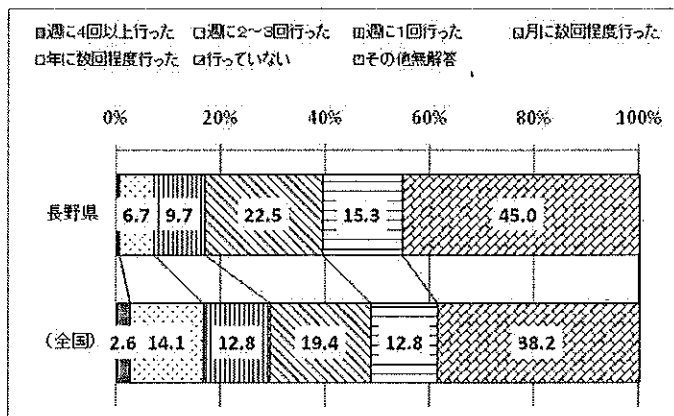
日常の授業の充実のためには、教科の特性や学習内容の体系化等教科の本質に迫る教材研究が必要である。ところが、様々な業務により時間が十分に確保できない、学校が小規模になり教科会が成立しにくい等により、教材研究が不足している現状が推測される。校務分掌の見直しや日課の工夫、地域との連携といった視点から、学校体制を見直し、授業や子どもの学びの姿について語り合う時間を生み出すなどして、教材研究を充実させたい。

2 補足的な学習指導に関して

放課後を利用して学習内容の定着が十分でない児童生徒に対して行う補足的な学習サポートの実施状況はグラフ13、14の通りである。

本県で「放課後に補足的なサポートを実施していない」割合は、グラフ13から小学校で45.0%、グラフ14から中学校で28.9%である。全国と比べて小学校で6.8%、中学校で15.0%高くなっている。これは、秋田県と比べると、小学校で22.9%、中学校で23.9%上回っている。

【グラフ13】放課後を利用した補足的サポートの実施(小学校)

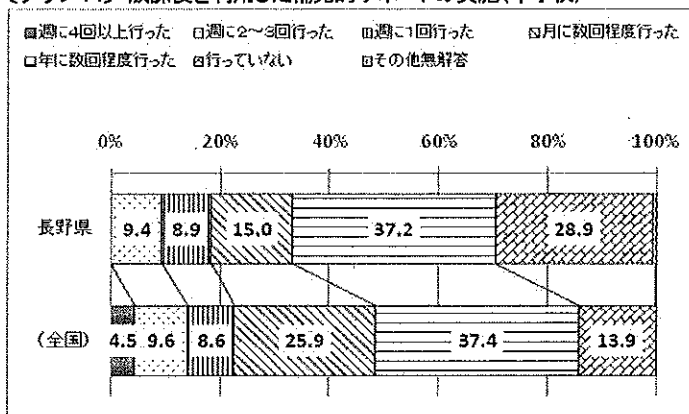


本県の小中学校は、通学距離が長いこと等の理由から、集団下校やスクールバスを利用した下校が行われているため、放課後の補充指導を位置付けることが難しい状況もある。また、校外外で行われる諸会合のために、補充指導を行いたくても行えない現状もあると聞く。

平均正答率の全国との差について改善傾向がみられる高知県は放課後を利用した補充的サポートを実施する割合が高く

なっている。高知県では、地域ボランティア等の協力により体制を整えている。本県においても、積極的に学校を地域に開き、学校と地域が連携して学力向上に取り組んでいくことに期待したい。

【グラフ14】 放課後を利用した補充的サポートの実施(中学校)



考察

学習内容の確実な定着には、授業における確実な見とどけと共に、定着状況が十分でない場合は、放課後等に補充・補完指導を行うことも必要である。本県においても、授業改善を進めるとともに、児童生徒に学習内容を確実に定着させる放課後を利用した指導の方法や体制について検討したい。

その際には、日課の見直しや週時程の工夫により指導する時間を確保する、職員会議の時間と並行して職員を配置し、地域の学習ボランティアの活用等の工夫により児童生徒に学習内容を確実に定着させるといった取組も考えられる。

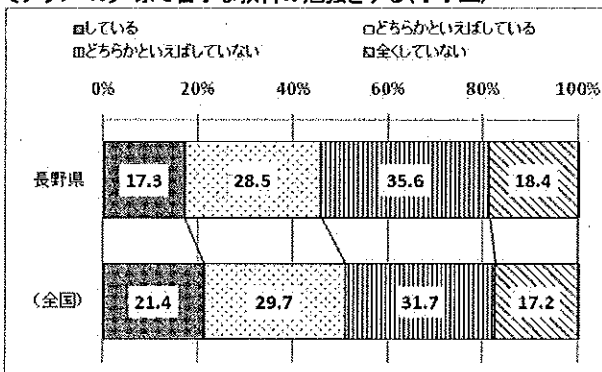
学校を地域に開き、地域の教育力を取り込むことで、多様な指導体制が可能となる。

3 家庭学習の内容や方法に関して

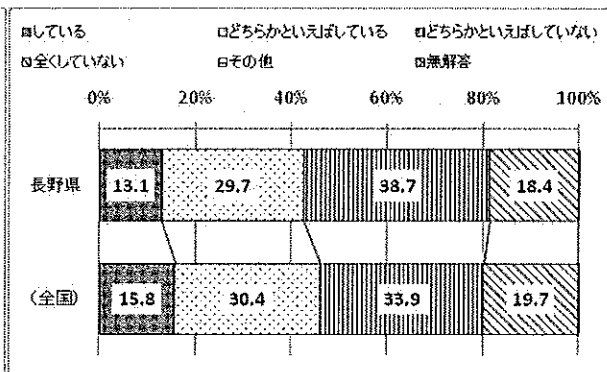
(1) 苦手な教科の勉強や自分で計画を立てた家庭学習

グラフ15から、「家で苦手な教科の勉強をする」割合は、小学生は45.8%で、全国と比べて5.3ポイント低い。グラフ16から中学生は42.8%で、全国比と比べて3.4ポイント低い。これは、秋田県と比べて小学生で20.1%、中学生で15.6%低い。

【グラフ15】 家で苦手な教科の勉強をする(小学生)

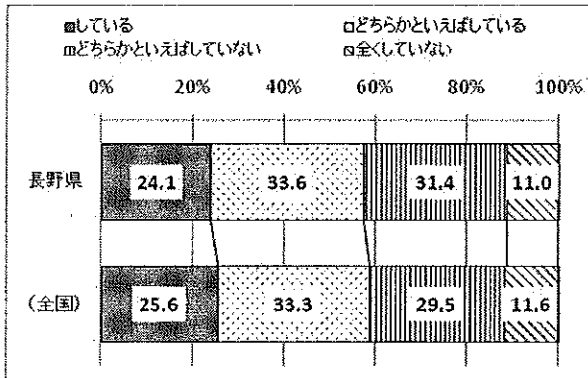


【グラフ16】 家で苦手な教科の勉強をする(中学生)

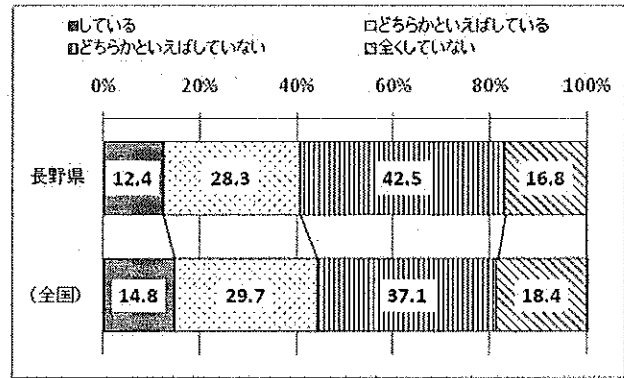


グラフ 17 から、「家で自分で計画を立てて勉強している」割合は、小学生で 44.7% で、全国より 7.7 ポイント低く、グラフ 18 から中学生は 48.3% で、全国より 0.3 ポイント低い。これは、秋田県と比べて、小学生で 15.6%、中学生で 8.7% 低い。

〔グラフ 17〕 家で自分で計画を立てて勉強をする(小学生)

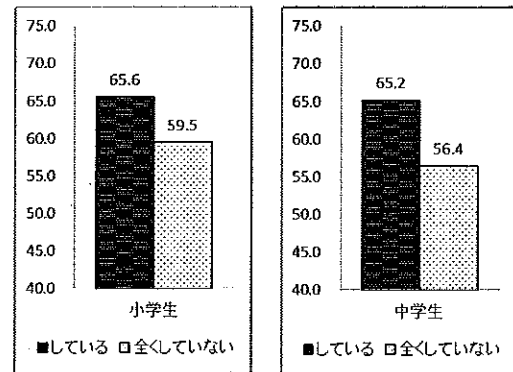


〔グラフ 18〕 家で自分で計画を立てて勉強をする(中学生)



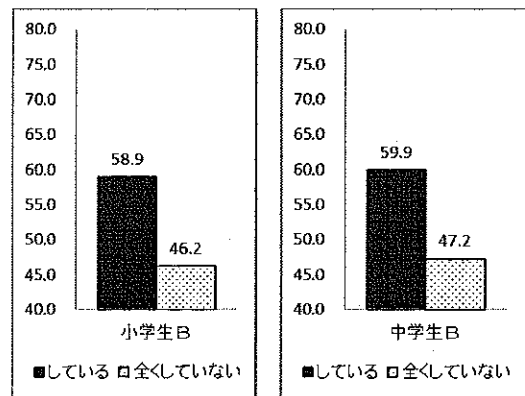
グラフ 19 から、「苦手な教科の勉強をしている」と回答した本県小学生の国語 AB、算数 AB の平均正答率は 65.6% で、全くしていないと回答した小学生の正答率は 59.5% である。本県中学生では、「苦手な教科の勉強をしている」と回答した生徒の国語 AB、数学 AB の平均正答率は 65.2% で、全くしていないと回答した生徒の正答率は 56.4% である。

〔グラフ 19〕 家で苦手な教科の勉強することと小学生、中学生の正答率の相関



グラフ 20 から、「家で自分で計画を立てて勉強している」と回答した小学生の国語 B、算数 B の平均正答率は 66.6% で、全くしていないと回答した小学生の正答率は 55.5% である。

〔グラフ 20〕 家で自分で計画を立てて勉強することと小学生、中学生の B 問題の正答率の相関



グラフ 21 から、「家で自分で計画を立てて勉強している」と回答した中学生では、していると回答した生徒の国語 B、数学 B の平均正答率は、67.4% で、全くしていないと回答した生徒の正答率は 55.7% である。

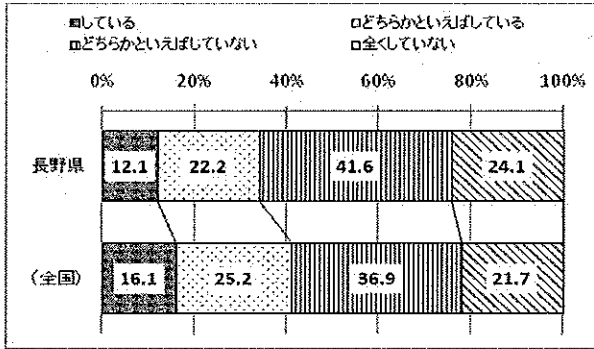
本県の小中学校では、一律に与えられたプリントや教師が指示したドリル学習を行う家庭学習が多くみられる。特に中学校では、漢字をノートに 1 ページ書く、計算をノートに 1 ページ行う、英単語をノートに 1 ページ書く、という家庭学習が広く行われており、学習習慣の確立という面で一定の成果はみられるものの、思考力・判断力・表

現力等の育成の面からは、検討の余地がある。また、提出しているかどうかのみを点検する傾向があり、内容にかかわる指導が薄い。その背景として、小中学校いずれにおいても家庭学習を教員が見て内容に応じてコメントする時間が十分に確保できない現状が考えられる。

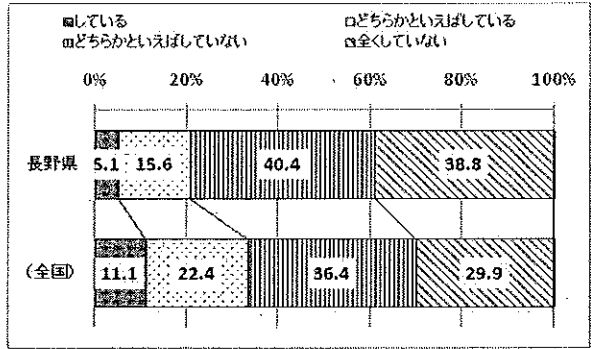
(2) 授業の予習と復習

グラフ 21 から「家で予習する」割合は、小学生は 34.3% で全国と比べて 4.0 ポイント低い。グラフ 22 から中学生は 20.7% で、全国と比べて 12.8 ポイント低い。これは、秋田県と比べて小学校で 12.5%、中学校で 7.6% 低い。グラフ 23 から「復習を行う」割合は、本県の小学生は 44.7% で、全国より 7.7 ポイント低く、グラフ 24 から中学生は 48.3% で、全国より 0.3 ポイント低い。これは、秋田県と比べると、小学生で 43.6%、中学生で 29.2% 低い。

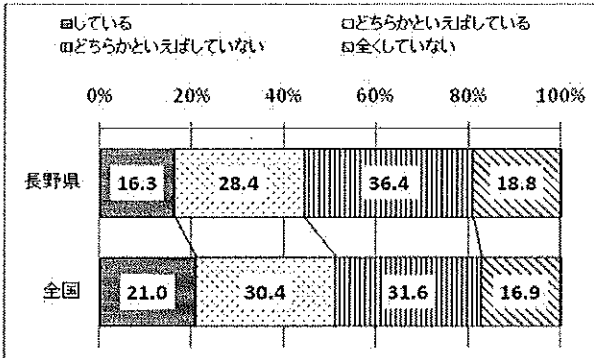
【グラフ 21】家で授業の予習をする(小学生)



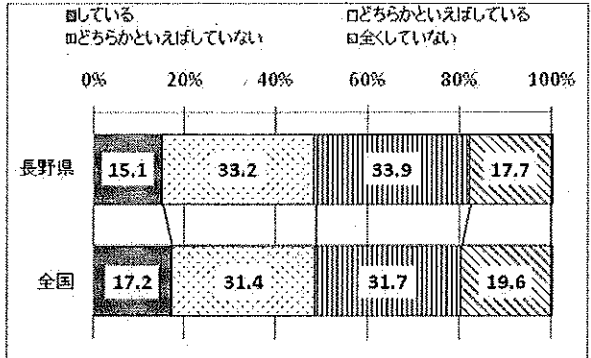
【グラフ 22】家で授業の予習をする(中学生)



【グラフ 23】家で授業の復習をする(小学生)

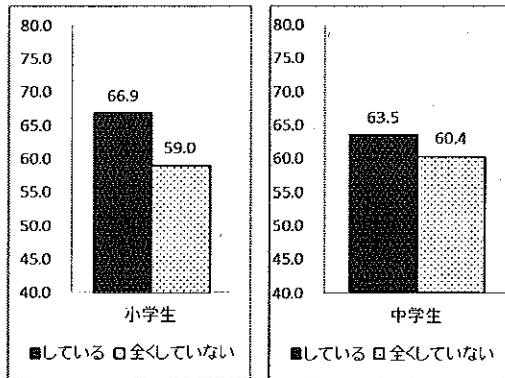


【グラフ 24】家で授業の復習をする(中学生)

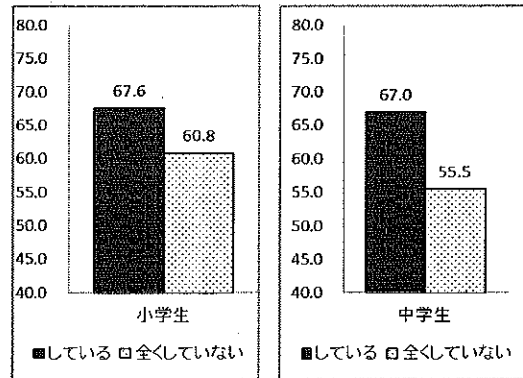


グラフ 25 から、「予習をしている」と回答した本県小学生の国語AB、算数ABの平均正答率は 67.6% で、「全くしていない」と回答した小学生は 60.8% である。「予習をしている」と回答した本県中学生の国語AB、数学ABの平均正答率は 63.5% で、「全くしていない」と回答した中学生は 60.4% である。グラフ 26 から、「復習をしている」と回答した小学生の国語AB、算数ABの平均正答率は 66.9% で、「全くしていない」と回答した小学生は 59.0% である。「予習をしている」と回答した中学生の国語AB、数学A Bの平均正答率は 67.0% で、「全くしていない」と回答した中学生は 55.5% である。

〔グラフ 25〕 予習をすることと小学生、中学生の正答率の相関



〔グラフ 26〕 復習をすることと小学生、中学生の正答率の相関



本県の児童生徒の家庭学習では、予習や復習など、授業と関連した内容が少ないことが伺える。

考察

本県の小中学校において、学級・教科担任から出る家庭学習の課題は、日常の授業とのつながりが希薄な状況が伺える。

家での学習について、「苦手な教科の学習や予習や復習を行っている」と回答している児童生徒は、「していない」と回答している児童生徒と比べて正答率が高く、また、自分で計画を立てて学習している児童生徒は特にB問題の正答率が高い。学習内容の確実な定着や活用する力を伸ばすために、家庭学習の内容が重要であると言える。家庭学習の内容を、予習、復習や苦手な教科の学習など授業と関連する課題としたり、個に応じた内容や方法を指導したりしていくことが重要である。

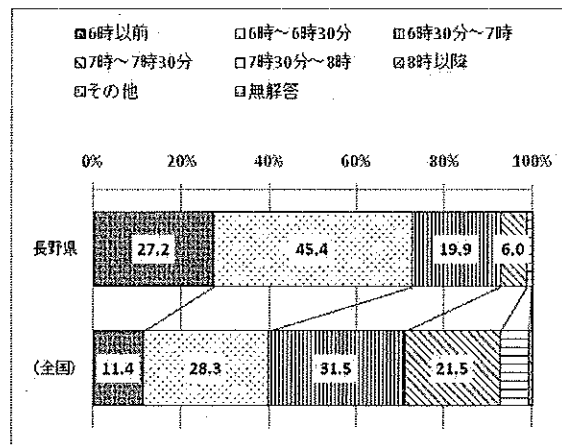
家庭学習の見直しに関しては、小中学校で連携して取り組むことや家庭と連携・協力することも検討していきたい。なお、児童生徒が提出した家庭学習の内容の点検に関しては、地域の学習支援ボランティアと連携することも考えられる。

4 中学生の生活実態に関して

(1) 中学生の起床時間

本県の中学生が普段起きる時間は、グラフ 27 の通りである。「6時30分より早く起きる生徒」の割合が72.6%と、全国平均を33.9ポイント上回っている。本県の中学生は大変早起きである。これは、本県の多くの学校で実施している部活動の朝練習も関係があると考えられる。

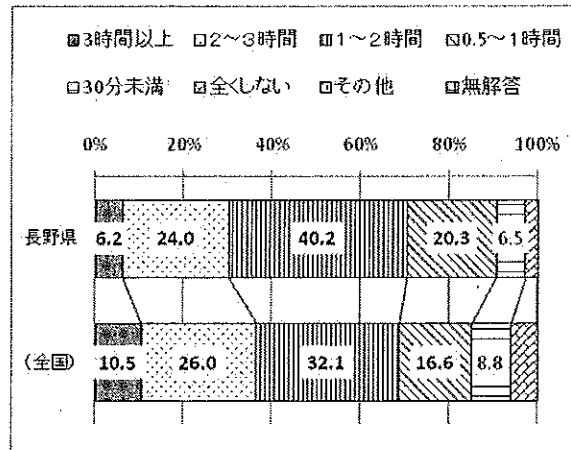
〔グラフ 27〕 普段(月～金曜日)起きる時間(中学生)



(2) 中学生の家庭学習の時間

本県の中学生の普段の学習時間は、グラフ 28 の通りである。全体の約 65% の生徒が 1 時間～3 時間、家庭学習の時間を、確保している状況である。しかし、全体の約 27% が 1 時間未満である。一定の学習時間を確保している生徒と、学習時間が不足している生徒に二分される傾向がある。

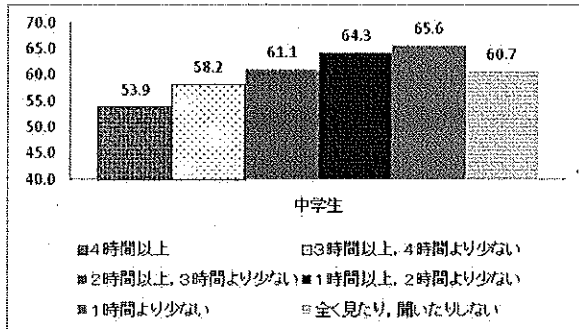
〔グラフ 28〕 普段(月～金曜日)の学習時間(中学生)



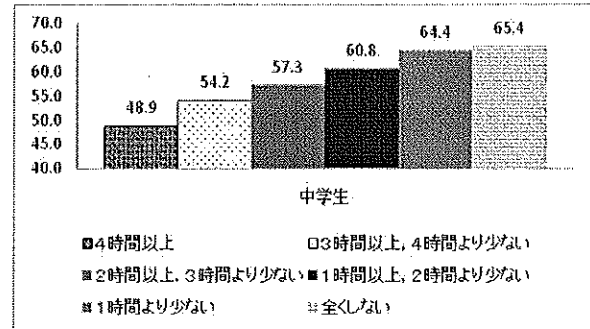
(3) テレビ等の視聴時間やゲームに費やす時間

本県の中学生がテレビやビデオ・DVDを見る時間やゲームをする時間は、全国と同程度である。テレビやビデオ・DVDの視聴時間と正答率の関係、ゲームをする時間と正答率の関係は、グラフ 29、30 の通りである。

〔グラフ 29〕 テレビやDVD等を見る時間と正答率の相関(中学生)



〔グラフ 30〕 ゲームをする時間と正答率の相関(中学生)

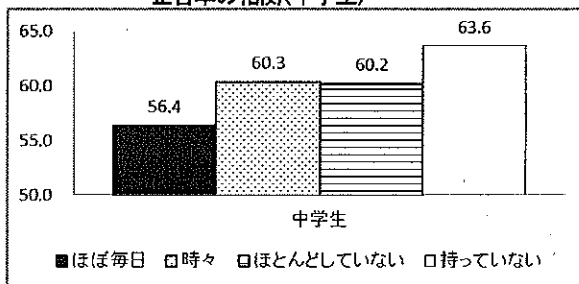


グラフ 29 から、「テレビを 4 時間以上見ている生徒」の正答率は 53.9%、グラフ 30 から「ゲームを 4 時間以上する生徒」の正答率は 48.9% である。

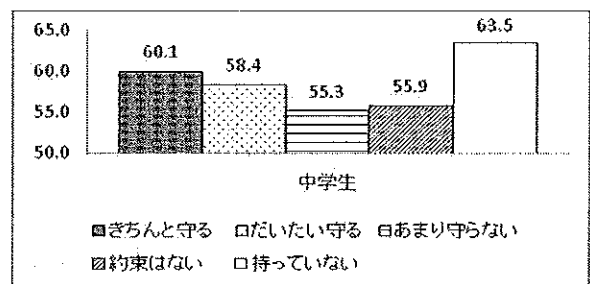
(4) 携帯電話やスマートフォンの使用

本県の中学生の携帯電話やスマートフォンの使用に関することと正答率の関係は、グラフ 31、32 の通りである。

〔グラフ 31〕 携帯での通話やメールの頻度と正答率の相関(中学生)



〔グラフ 32〕 携帯等の使い方の約束と正答率の相関(中学生)



グラフ 31 から、「携帯電話・スマートフォンで通話やメールをほぼ毎日する」と回答した生徒の国語A、数学ABの平均正答率は56.4%で、「時々、ほとんどしない」生徒と4ポイント程度の開きが見られる。また、グラフ 32 から「携帯電話等の使用についての親との約束をきちんと守る生徒」の正答率は60.1%で、「あまり守らない生徒」や「きまりがない生徒」より5ポイント程度高い。

考察

本県の中学生の起床時間が大変早いことに関しては、部活動の朝練習との関係も考えられる。また、「テレビやビデオ等の視聴時間やゲーム等に費やす時間などが少ない生徒」や「携帯電話やスマートフォンの使用に関して約束をして守っている生徒」の正答率が高い傾向が見られた。

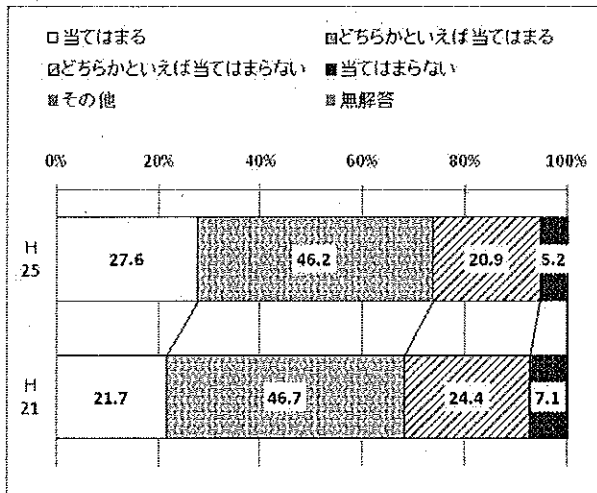
中学生の生活については、部活動とのかかわりも含め、生活全般からの見直しをする必要がある。

5 30人規模学級の効果に関して

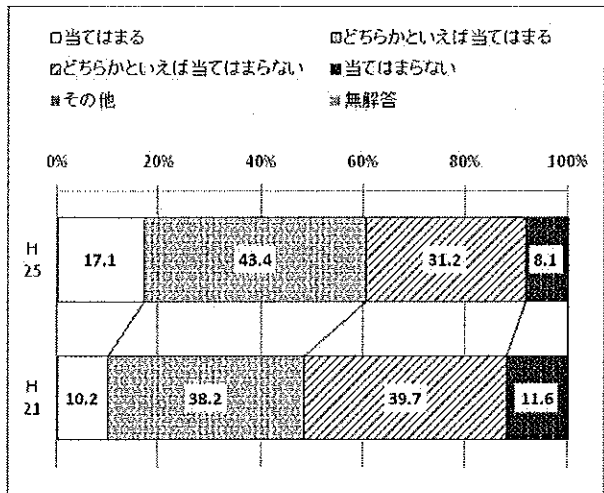
(1) 授業への効果について

平成25年度の中学3学年は、中学1学年から30人規模学級が導入された学年である。30人規模学級が導入されている学校について、本年度の教科に関する調査の結果と30人規模学級が導入される前の平成21年度の結果とを比較した。その結果、平均正答率等の教科に関する調査については、明確な差異はみられなかった。一方、質問紙調査については、いくつかの項目で成果がみられた。

〔グラフ 33〕 授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思うか(中学生)



〔グラフ 34〕 授業で生徒の間で話し合う活動がよく行われていると思うか(中学生)

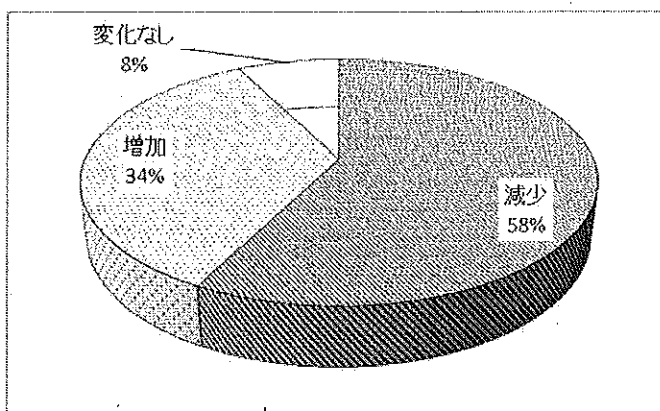


グラフ 33 から、「普通の授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思う」割合は、21年度の21.7%に対して25年度が27.6%であり、6.1ポイント増加している。また、グラフ 34 から「授業で、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」割合は、21年度の10.2%に対して25年度は17.1%であり、6.9ポイント増加している。30人規模になり、教師がきめ細かく指導することが可能になったことも要因であると考えられる。

(2) 不登校生徒数の減少への効果について

30人規模学級の効果については、多面的にみる必要があることから、文部科学省が実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を基に、30人規模学級実施校について、不登校生徒数を比較した。その結果はグラフ35の通りである。平成25年度に30人規模学級を導入している学校についてみると、不登校生徒数が、減少している学校の割合は58%であり、増加した学校の割合は34%である。不登校生徒数が減少した学校の割合が大変高くなっている。

【グラフ 35】 30人規模学級導入校における不登校生徒数の増減の割合
(H21 中学3年生とH25 中学3年生の、中学2年修了時点で比較)



考察

中学校の30人規模学級実施校では、「授業がよく分かる」と回答した生徒の割合や「生徒一人一人が自分の考えを発表する機会がある」と回答した生徒の割合が増加している。また、「授業での話し合いがよく行われるようになっている」と回答している生徒の割合が増加している。これは、学級規模が小さくなった効果とみることができる。先行して30人規模学級を継続して実施している小学校では、教科の調査についても一定の効果が見られることから、中学校においても今後継続していくことで、教科等でも成果が期待できる。

また、30人規模学級実施校では、不登校生が減少した学校の割合が高くなっている。これも、一人一人に対してきめ細かい指導ができる少人数学級の効果の表れとみることができる。

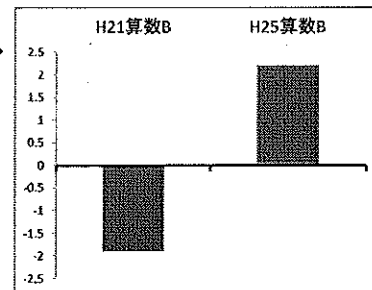
本県で全国に先がけて導入した30人規模のよさを、指導改善に積極的に生かしたい。

IV 市町村教育委員会や学校の取組について

1 市町村教育委員会の取組

(1) 小学校算数Bで伸びがみられたA市

A市では、平成21年度は小学校算数Bで課題がみられたが、平成25年度は全国平均正答率を上回った。平成25年度は、小中の全ての教科の調査で全国平均正答率を上回っている。中学校では、家で学校の授業の復習をしていると答えた生徒の割合が全国を上回っている点にも注目される。



1 市町村の教育ビジョンや特色ある教育施策について

○基礎的・汎用的能力を踏まえて各校の実態を把握し、全体計画および指導計画を作成。計画的なキャリア教育の推進により学習意欲の向上を図る。

2 学力向上等を協議する組織の設置や研修の実施について

○学力向上推進委員会

- ・全国学力・学習状況調査の結果を分析して市全体の学力や学習状況を把握するとともに、これまでの取組を検証して成果と課題を明らかにする。
- ・「①授業の改善策」「②生活・学習習慣の改善策」を策定して、全小中学校で推進

○研究協力校の指定

- ・学力推進委員会の改善策を受け、公開研究授業の実施
- ・アドバイザーである大学教授による指導及び講演

○教育課程改善研修会

- ・夏休み最後に、市内全教員が集まり、教育課程改善に係る研修を実施
- ・本年度は、「言語活動の充実」をテーマに国立教育政策研究所調査官による講演と市内の学校の代表による実践発表

3 学校教育を支える支援について

○全中学校地内に中間教室を設け、市独自に教員を配置

○各学校に必要なよって特別支援教育介助員を配置

4 地域の教育力が生かされる支援について

○市報で全国学力・学習状況調査の結果の概要を今後の学校や教育委員会としての対応も含めて広く市民に公表

5 その他

○分かる授業のためのICT機器の整備

小学校4～6年の全普通教室にプロジェクターを設置。デジタル教科書などの教材を使った教育機器を活用した学習を推進するとともに、パソコン教室の更新により個別学習、協働学習による分かる授業の展開

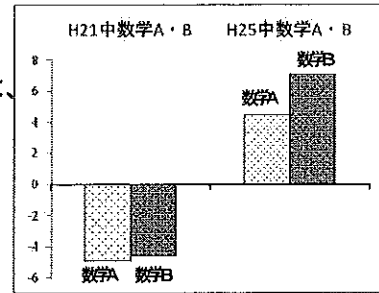
○学力の基盤となる学級経営の安定

全ての児童生徒を対象に、「楽しい学校生活を送るためのアンケート(Q-U検査)」を実施。

A市では、全国学力・学習状況調査が抽出実施だった際にも、希望利用によって全校実施し、市全体の結果を把握、分析して施策等の改善に生かしてきた。市民へ結果の概要の公表も行うなど、調査を貴重なデータとして積極的に活用してきている点に学びたい。

(2) 中学校数学A Bで大きな改善がみられたB町

B町では、平成21年度は中学校数学A Bに課題がみられたが、平成25年度は大きな改善傾向がみられた。平成25年度は、小中の全ての教科の調査で全国平均正答率を上回っている。小中共に、B問題の平均正答率が高い傾向がある。



1 市町村の教育ビジョンや特色ある教育施策について

○遊びや運動などで体を動かせる子どもを育成する事業の継続的な実施

保育園から小学校低学年までを対象に、10年目の取組。前頭葉の発達による落ち着きや意欲のある子どもの育成が実を結び、判断力も付くようになるなどの評価がある。

○英語活動・英語教育の推進

小学校卒業時に外国人と日常会話ができるレベルを目標に、幼児から中学生まで、それぞれの水準に合わせたカリキュラムで実施。英語担当教員の海外研修も実施している。

○読書による人づくりの推進

本を読むことにより、生き方、考える力、集中力を備えた子どもを育成するため、小中学校の図書館に潤沢に本を提供し、知識豊富な図書館司書の配置、小中学校の図書館書籍のネットワークシステムの導入。ボランティアによる読み聞かせの充実を図っている。

2 学力向上等を協議する組織の設置や研修の実施について

○教職員の指導力向上のために先進地研修の実施

○英語教育にかかわる合同会議を開催

3 学校教育を支える支援について

○放課後学習サポートの実施

平成25年度より、小中学生の学力向上のために放課後学習指導を行う。

○財政支援を手厚くし、学校教育を支える体制

校長の自由裁量で使用できる振興協力金を規模に応じて50万円～100万円を支給している。

○町費による中学校への教員の加配

平成21年度から英語と数学、平成24年度から国語も加えて加配を行っている。

4 地域の教育力が生かされる支援について

○独自に作成した学校・家庭連携指針を全小学校で活用

県の「共育」クローバープラン（本を読む、汗を流す、挨拶・声がけをする、スイッチを切る）もつながる内容を明示して、家庭と学校が一体で児童を育てる取組を進めている。

5 その他

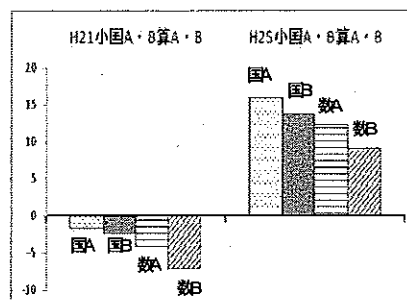
○Q-U検査は、学校配当予算で各校の判断で実施している。

○電子黒板等の整備。特に中学校での活用が進んでいる。

B町では、運動や英語、読書を町の教育の重点として、独自の施策を継続実施している。その背景には、学校を大事にする地域、学校のために諸施策を推進するための教育委員会と町当局との協力がある。理念に基づいた重点施策を、首長部局の理解を得て継続していることが参考になる。

(3) 小中ともに大きな伸びがみられたC村

C村では、平成21年度は中学校国語A・Bで全国平均正答率を上回ったが、それ以外については小中共に課題がみられた。平成25年度は、小中の全ての教科の調査で全国平均正答率を上回っている。特に、小学校の伸びが大きくなっている。



1 市町村の教育ビジョン、特色ある教育施策の推進

- 自然と共に人間らしさを育む村。子どものためにできること、親が環境をつくってあげたいと願いを明確にしている。
- じりつ（自律・自立）をキーワードに、自然体験、生活体験を通して、健全な心を育てることを重視し、健全な心の上に学力をつけていくとの考え方で取り組んでいる。

2 学力向上等を協議する組織の設置や研修の実施

- 小中連携による学力向上の取組として、小中合同会議を年6回実施。合同会議には、3つの委員会を組織して具体的な取組を行っている。
 - ・「NRT 調査等の分析と考察」：小2～6、中1～3でNRTを実施。小中の接続となる小6と中1の結果を中心に協議している。
 - ・「授業づくり」：9か年に共通する「授業の約束」を作り、学年に応じて指導。中学校の音楽や理科の教員による小学校での授業。
 - ・「家庭学習の充実と改善」：9か年を見通した家庭学習のあり方について協議し、「家庭学習の手引き」にまとめ、小中で連携して保護者の理解・協力を得て指導している。

3 学校教育を支える支援について

- 特色ある学校づくりで各校に10万円の予算付け。校長裁量で使用

4 地域の教育力が生かされる支援について

- 小さな村だからできる教育。家庭と地域が子どもを育てる環境を目指す。中学生の職場体験学習は各学年が3日行っており、1年生については全て地域の職場で受け入れている。また、老人ホームの集いやロードレースなどの村の企画に、中学生が運営スタッフとして参加し、村民としての自覚が深まる機会になっている。
- 村教委にボランティアコーディネーターを配置。学校の要請によりボランティアを手配

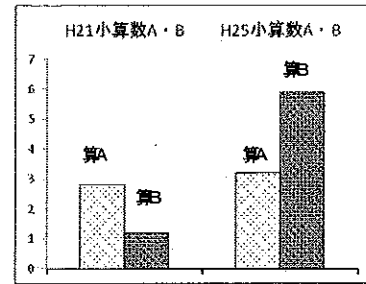
5 その他

- 各校に電子黒板を設置。小学校では、普通教室の電子黒板で国語、算数のデジタル教科書も活用

C村では、小中学校が隣り合っていることを生かして小中連携を進めたり、地域で子どもを育てるということから中学校全学年で実施している職場体験学習の受け入れをしたりしている。地域のよさを生かした取組をしていることが参考になる。

(4) 小中ともに一定の成果を出し続けているD市

D市では、平成21年度及び25年度の両年度で、小中全ての教科の調査で全国平均正答率を上回っている。普段の授業で、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると答えた児童生徒の割合が県平均を上回っている。



1 市町村の教育ビジョンや特色ある教育施策について

○子どもの育成に関して支援する事業

- ・各校園において支援を要する子を早期に発見し、適切な支援を継続して行う。
- ・専門の相談員(特別支援、教育相談員等)が定期的に各校園を訪問し、指導・助言を行う。
- ・支援の記録を蓄積し、指導に生かす。
- ・本事業の最初の対象学年が、今年度の6学年であり、中学校へと接続する。

○低学年の学習を支援する事業

- ・安心して学習に取り組めるよう、低学年の学習支援を可能とする柔軟な職員配置
- ・1学年時の集団作りのための適応指導を大事に考えている。

○読書指導、小学校低学年からの国際理解教育(英語活動)

2 学力向上等を協議する組織の設置や研修の実施について

○教育課程編成研究委員会の機能強化

- ・教務主任を委員として、年に5～6回実施
- ・学力向上に向けた各校の課題と取組、学力調査の分析結果等の情報交換を行う。

○各校の研究会に参加できる体制の構築

- ・各校の研究授業及び授業研究会に参加し、互いに学び合う。
- ・教頭間で連絡を取り合い、いつでも、誰でも、どこへでも参加し合える体制を取っている。

3 学校教育を支える支援について

○少人数規模で指導ができるよう、市独自に教員を加配

- ・高学年の算数の指導の充実を図る、ティーム・ティーチング教員の配置。
- ・個別指導の充実により、全体的な底上げが図られている。

○市の教育センターに、配置の教育相談員による、各校の授業改善を支援する仕組の構築

4 地域の教育力が生かされる支援について

○市の図書館と連携した読書活動の充実

○ボランティアによる放課後、長期休業中の補充学習の実施

5 その他

○小学校への接続を考慮し、保育の充実を図る。

○ICTを活用した授業への指導・助言を行う。

○Q-U調査の実施(全小中学校1学年分を市の予算で負担。中学校は年2回)

D市では、幼保小の接続や低学年指導を大切にす体制を整えたり、市内の教職員が相互に学び合える仕組を構築したりしている。子ども理解を深めて、適切な指導をするために、教員が研修できるしかけがある点に学びたい。

2 学校の取組

(1)「書くこと」を重視した授業改善に努めているA小学校

《A小学校は、平成21年度までの3回の全国学力・学習状況調査の教科の調査では、課題が大きい状況であったが、平成25年度は全国平均を全てで上回り、B問題が特に良好な結果であった。》

1 校内研修や、教員同士の連携について

- ・「子どもの意識の流れを大切にした授業の構築」を学習指導のベースにおき、一人一公開授業を行ったり、全職員で共通理解するための研修を設定したりしている。また、「考え合う場を大切にした授業」のために、学年会や教科会において教材研究の時間を確保し、教師同士が学び合いながら学力向上に取り組むことができるようにしている。

2 授業改善について

- ・小学校1年生から「書くこと」を重点として授業改善に取り組んでいる。学力向上委員会（各学年主任と研究主任、教頭）を校内に設置し、学力調査の結果と対応策についてまとめ、保護者に伝えるとともに、各学年で改善に取り組んでいる。
- ・どの教科においても1時間の終わりの5分を学習課題に対する振り返りの時間として確保するようにしている。学習カードやノートに自分の考えを書くことを大切にして、継続して指導している。また、クリア問題チャレンジ問題等を活用して、ねらいを達成したかどうかを教師が評価していくようにしている。

3 児童生徒理解や、学級づくりについて

- ・市の予算により、Q-U調査を年2回行っている。結果を分析することにより、心配される児童への支援をすぐに行うようにしている。また、相談週間を各学期1回設け、個別にゆっくりと話をする時間をとり、児童理解に心がけている。

4 家庭学習について

- ・授業の内容を課題とするなど、授業とリンクした家庭学習となるようにし、学習内容を確実に定着させることを目指している。また、市の学力推進委員会において作成した家庭学習手引を活用していただけるよう、PTA総会等の場で家庭に協力を図り、家庭学習の充実や学力の向上を目指している。

5 地域の教育力活用について

- ・毎週水曜日の放課後25分のドリルタイムを行っている。この時間には、地域の学習ボランティア（4名の保護者）に隔週で来ていただいている。児童は分からない点を丁寧に聞くことができ、学習への意欲を高めている。また、一人一人への声がけにより良いところを認めていただき、自信を深めながら学習に取り組むことができている。

6 学力向上の基盤となる指導

- ・各小中学校の学力向上担当者による市の学力推進委員会において、家庭学習のあり方や授業改善の取組等について討議し、小中で共通意識をもって指導できるようにしている。

(2) 特別支援教育の視点から指導改善を図っているB小学校

《B小学校は、平成19年度から21年度の全国学力・学習状況調査の教科の調査では、平均をやや上回る程度であったが、平成25年度は全国平均を全てで上回り、大変良好な結果であった。》

1 校内研修や、教員同士の連携について

- ・算数の少人数学習を4年～6年で実施。少人数指導で、他学級の児童も指導することから、放課後等、少人数指導の教員も交えて学年の教員が児童の学習の様子を話し合うことが多い。単元テストやNRTで、誤答の状況の情報を共有し、誤答の多い箇所については学習プリントを少人数指導教員が作成し、授業の中で補充指導をするようにしている。

2 授業改善について

- ・確認問題により評価し、授業の中での個別指導や補充問題による指導を継続してきた。また、児童の実態に応じて、保護者や本人の了解のもと、空き時間の教員等が個別支援を継続してきた。
- ・特別支援教育の視点からの授業改善を図っている。例えば、各教室に先の見通しがもてないと不安になり学習に取り組めない児童がいることから、授業の始めに、今日の学習の進め方として、「始めに」「次に」「終わりに」何をするか話し、学習の流れを板書で明示するようにしている。また、発問や指示を具体的で短いことばにすることや、口頭で発することばと板書に書くことばを一致させるようにしている。

3 児童生徒理解や、学級づくりについて

- ・特別支援研修会を年間計画に3回位置づけ、Q-U調査の結果を持ち寄り事例検討会を行ったり、支援を必要とする児童を中心に置いたケース会議や保護者を交えた支援会議をもって支援のあり方を随時相談したりしてきた。また、職員会議の協議題で「児童理解」を定例として扱い、支援のあり方や開かれた学級づくりのあり方について共通理解を図ってきている。

4 家庭学習について

- ・各学年の代表者と研究主任からなる学力向上委員会を組織し、各学年の実態の洗い出し。他校や中学校と情報交換をしながら、家庭学習のあり方について原案を作成。教務会での検討を経て職員会議に提案。各学年会で更に学年の実態と照らして再検討。4月に新職員と共に内容を確認した後、手引きに沿った指導を開始している。指導に当たっては、学力調査等の結果を保護者に伝え、家庭と連携して取り組んでいる。

5 地域の教育力活用について

- ・10年以上前から、地域ボランティアによる読み聞かせを実施。総合的な学習の時間には、地域の桃の学習で地域の方々に学んでいる。また、3年生以上が参加して行う体験交流講座を毎年開催し、地域の食や伝統文化を地域の方々に学んでいる。

6 学力向上の基盤となる指導

- ・視覚よりも聴覚で情報を取り入れることが得意な児童もいることから、学力向上委員会の委員長が担当者となり、視覚・聴覚両面に有効な教材の利用や開発（例えば、九九の歌、部首の歌など）を進めている。

(3) 職員同士に連携があり、保護者も協力的なC小学校

《C小学校は、全国学力・学習状況調査の教科の調査では、平成19、20、21の各年度でも良好な結果で、平成25年度も全国平均を全てで上回り、良好な結果であった。》

1 校内研修や、教員同士の連携について

- ・休み時間等に、職員同士による授業についての情報交換が積極的に行われている。教師間のコミュニケーションが大変充実している。
- ・全校では重点研究の体制をとっているが、学年内を中心に指導案なしで気軽に授業を見合う関係にある。学習プリント等も、ある学級で作成したものは学年内で交換し合っ、どの学級も同一歩調で学習内容を定着させようと取り組んでいる。

2 授業改善について

- ・全学年を通じて書く活動を大事にしている。授業では、「書く」場を確保している。国語の授業では、「書くこと」に関する系統的な指導が積み上げられている。また、学年に応じて日記を書かせており、学級担任が休み時間等を活用し、内容のわかりやすさ、表現の豊かさ等について朱書きでコメントするように努めている。
- ・机間指導では、個々の子どもの見方や考え方をとらえて評価する等の指導に心がけている。また、一人一人が活躍する場を意識し、ペア学習の場などで説明し合ったり考えたりする場を取り入れるようにしている。
- ・学習カードに書かれたことについて、個々の子どもの見方や考え方、気付きのよさに着目して評価し、次の指導に生かすように工夫している。

3 児童生徒理解や、学級づくりについて

- ・総合的な学習の時間や特別活動などでいろいろな活動の場面を設定し、一人一人の活躍の場ができるようにしている。また、内外に向けた発表の場や、姉妹学級、学年間の交流を行い、目標に照らして自分の取組やかかわり方のよさなどを見返す、振り返り場面を仕組んでいる。

4 家庭学習について

- ・全学年に基本的な取り組み方の手引きを作成し、学習習慣の確立と授業の復習など、自ら考えて行う家庭学習に取り組んでいる。また、保護者の家庭学習に対する意識が高く、保護者が家庭学習の取組を点検したり、必要な助言をしたりすることもみられる。

5 地域の教育力活用について

- ・全国学力・学習状況調査やCRT等の結果分析から成果と課題について考察を作成し、全保護者への説明会を実施したり、個別懇談会を活用して個別に説明を実施したりする。

6 学力向上の基盤となる指導

- ・子どもたちのアイデアや発想を生かした生活を大事にしており、例えば、児童会活動等の計画や運営について、子どもたちの自主的、自発的な発想や取組を尊重している。そのことで、「やらされる」から「自分たちでやる」という主体性が育まれている。

(4) 食育による生活習慣の確立を大切にしているD中学校

《D中学校は、平成21年度の全国学力・学習状況調査の教科の調査では、平均をやや上回る程度であったが、平成25年度は全国平均を全てで上回り、大変良好な結果であった。》

1 校内研修や、教員同士の連携について

- ・一公開に限らず、研究グループのメンバーで気軽に授業を参観し、共通認識の上でグループ学習に焦点をあてた研究会を行った。

2 授業改善について

- ・各教科の追究場面でグループ学習やペア学習を行うことにより、誰とでも話し合えるような雰囲気になってきている。また、グループ学習は、役割を決めて行うことで発言者が固定化しないように努めている。

3 児童生徒理解や、学級づくりについて

- ・生徒会が行った人権宣言を柱にした活動を展開。中1の終わり頃に固定化した人間関係がくずれ、トラブルが見られる傾向がある。いじめ等は全校で課題にして考え合う。それを乗り越えたと学級が伸びる。学力向上の基盤としての学級づくりを重視している。

4 家庭学習について

- ・ノート1pを使う作業的な家庭学習を疑問視する地域の声をきっかけに、家庭学習が子どもの力をつける内容になっているかを協議し、改善を図った。国数英の合同教科会で「家庭学習の手引き」を作成し、生徒に配布、説明。参観日では、保護者にも家庭学習への協力を依頼した。手引き作成に当たっては、見本を示したり、授業との関連を考えた課題や感想記入欄を設けたりした。
- ・取組の個人差に対して補充指導やプリントでの学習等の対応をした。また、24年12月以降に、国数英の合同教科会を行い、平成25年度の改善に向けて生徒の家庭学習の取組内容等を協議した。

5 地域の教育力活用について

- ・家庭に対して、学校だよりでNRTの結果を公表し、分析と改善の方向を説明している。
- ・地教委の支援を受けて、地域ボランティアによる放課後学習支援を実施。10月の後半から2月まで週に2回（1回90分）、希望する生徒に対して数学と英語の補習を行った。

6 学力向上の基盤となる指導

- ・朝食を食べる生徒の学力が高いという相関関係に着目。保健便りで、早寝早起き朝ご飯をこまめに呼びかけている。給食のない日を「手作り弁当の日」として、生徒が自分で弁当を作る機会を設けている。また、それに合わせて、栄養士による指導も実施している。

(5) 校内研修の活性化を図っているE中学校

《E中学校は、全国学力・学習状況調査の教科の調査では、平成19年度から21年度の間で伸びがみられ、一定の成果が出ている。平成25年度も全国平均を全てで上回り、特に数学Bが良好である。》

1 校内研修や、教員同士の連携について

- ・「授業スキル向上研修」を活用し、教師の専門性の強化と日常の授業改善につなげるために、平成24年度に数学科、平成25年度には数学科と英語科で校内研修を実施
- ・6月と11月に1週間程度の期間を設けて、一人一公開授業を実施。授業後は参加可能な職員による放課後のミニ研究会を開催。また、学校長が授業の様子が分かる写真と授業の感想をA4判1枚に記し授業者に渡している。
- ・若い教師が多い現状から、職員会議終了後、1時間程度、有志の自主参加（毎回10名程度）で授業の基本の確認や自分の授業についての悩みなどを語り合う教師力向上研修を実施。
- ・小中連携のために小中学校の職員同士の交流や研修会を実施し、学力向上について研究する、中学校区学力向上研究会を実施

2 授業改善について

- ・全国学力・学習状況調査B問題や授業アイデア例を利用して、生徒の「活用する力」を伸ばすための授業を実施している。
- ・CRTの結果を家庭に伝え、課題意識を持って授業改善に取り組んでいる。

3 児童生徒理解や、学級づくりについて

- ・放課後を使い、課題（学習や人間関係）を抱える子どもたちに対して、学級担任が相談にあっている。

4 家庭学習について

- ・国語では新聞の書き写しと語句調べを実施。数学ではクリア・チャレンジ問題を利用して自作プリントによる宿題を出し、教科担任が評価して返却。補充が必要な生徒には休み時間や放課後、個別に対応している。

5 地域の教育力活用について

- ・放課後の補充指導のために、平成24年度は6月から11月まで、平成25年度は10月から、信州大学教育学部の地域教育演習を利用した大学生による補充指導を週1回実施している。

6 学力向上の基盤となる指導

- ・中学1年から3年までの全単元のドリル的な問題（教科書の例題及び練習問題）を準備し、週2回、数学科職員が担当して希望者参加に対する校内数学検定を実施
- ・現3年生に対して、入学時から基礎学力の定着に不安を感じていたため、各学級5名程度を対象に、週2回程度の放課後補充指導を継続して実施。学年内の教科担当がプリントを作成し学年内の部活動福顧問が指導を担当している。
- ・校長室前に数学チャレンジ問題を準備し、希望者が問題を解き、学校長が採点している。

(6) 家庭学習での予習・復習を指導をしているF中学校

《F中学校は、平成21年度までの全国学力・学習状況調査の教科の調査では、平均をやや上回る程度であったが、平成25年度は全国平均を全てで上回り、良好な結果であった。》

1 校内研修や、教員同士の連携について

- ・1学年当初の学力調査で把握した課題を、数学の教科担任と学級担任が共有し、両者で積極的に休み時間等に補充指導をした。1年ほどで指導の成果が表れ、生徒からも「数学が楽しい」「数学が得意」といった声が聞かれるようになった。学級担任が協力的に教科指導にかかわる姿が見られており、学年の生徒を学年で育てるという気持ちが学校全体にある。

2 授業改善について

- ・表現力に関する課題の改善と知識・技能の定着を目的に、答えを出す過程を小グループで話し合う活動を各教科で位置付けるようにしている。数学では、「なぜそう考えたか」を大切に話し合うことで、知識・技能が思考・判断に裏付けられた確かなものになってきた。
- ・どの教科においても、授業の終末に5分間程度の自己評価の時間を設け、分かったことや自己評価を記述させ、授業後には教師が点検、朱書きをしている。つまづきをとらえて次時に補充したり、次時の学習問題に前時の気づきを反映させたりしている。生徒からは、「先生からの朱書きが楽しみ」「疑問に答えてもらえる」等の声が聞かれている。

3 児童生徒理解や、学級づくりについて

- ・学級活動や授業の中で、達成感や充実感、存在感が味わえる場面を積極的に作り出すようにしている。具体的には、授業中にペア活動やグループ活動を仕組み、学び合う場を設定したり、学級活動で自分の思いを伝える1分間スピーチを行ったりしている。そうした取組が、互いの良さを認め合う好ましい集団づくりにつながっている。

4 家庭学習について

- ・「家庭学習の手引き」では、予習―授業―復習を行って、定期テストで確認といったサイクルを大切にした学習方法を示し、日常的に予習・復習を家庭学習に取り入れるよう指導してきた。特に予習の大切さを指導し、予習をする生徒の割合が増えてきている。また、既習内容の定着にとどまらず、自学の気風を高めるために、各教科が発展的な内容を取り入れた家庭学習の例を提示し、自主勉強ノートを活用した家庭学習を行えるように指導している。

5 地域の教育力活用について

- ・NRTやPDCA調査の分析結果を基にした教科毎の課題について、学年PTAで全体的な傾向や学校の取り組みについて説明し、保護者のと連携して改善に取り組んでいる。

6 学力向上の基盤となる指導

- ・規律ある学校生活を送るために、「きちんと食べること」に着目し、食育に力を入れて取り組んできた。家庭と連携して朝食・夕食のあり方について考え合ったり、健康フォーラムを毎年開催して食育に関する理解を深めたりしている。その結果、生徒の生活習慣がしっかりと確立され、朝から活気溢れる学校生活が送れているように思われる。

これらの学校は、いずれも地域や児童の実態を踏まえ、全国学力・学習状況調査やNRT、CRT等の結果から自校の課題を明確にし、課題解決に向けて校長のリーダーシップのもと、全教職員が協働して教育活動に取り組んでいる。

また、学力調査に関する結果と改善の方向を家庭へ伝え、家庭と連携して学力向上に取り組んでいる。

特に、各校の取組に共通してみえてくる次の3点に学びたい。

☆ 全校で取り組む学力向上のための具体的な方策を明確にして、教職員が連携、協働して指導改善に努めている。

☆ 家庭学習の内容を検討し、予習や復習など授業と関係付けた内容にしたり、自主学習を取り入れたりしている。また、家庭学習に関して保護者の理解や協力を得るようにしている。

☆ 明確な改善プランに基づき、自校の子どもの実態にそった学力の基盤づくりに努めている。

- ・ 児童理解と学級づくりの重視
- ・ 生徒会活動等、自主的・自発的な取組の支援
- ・ 食育や読書の推進
- ・ 地域ボランティアの導入
- など

V 今後の改善に向けた取組について

1 授業改善について

(1) 小学校

課題

◆本県の小学生は、中位層が多く上位層がやや少ない。伸びる力をさらに伸ばす指導が課題である。

改善の方向

○一人一人の子供の定着の状況を把握し、個に応じた課題を与える。

県教委に期待する取組

- 授業で使用できる定着確認問題の提供。
例えば、クリア・チャレンジ問題の拡充。
- 活用する力を伸ばす指導事例の紹介。

(2) 中学校

課題

- ◆本県の中学生には、身に付けておくべき知識・技能が十分に定着していない状況がみられる。
また、正答率も年々下降していることから、知識・技能を確実に定着させる指導が課題である。
- ◆考えや事柄が成り立つ理由などを、言葉で記述して説明することに課題がある。

改善の方向

- 基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習においても解決の方法を説明する学習を行う。
- 知識・技能の定着状況を見とどけ、確実に身に付くまで継続して指導する。
- 実生活の様々な場面の課題を、知識・技能を活用して解決する授業の充実を図る。

県教委に期待する取組

- 生徒の学力実態を把握し、授業改善につながる仕組の整備。
- 教員の授業力向上のための研修の充実。
- 授業や補充指導で使用できる問題の提供。
- 活用する力を伸ばす指導事例の紹介。

2 補充指導について

課題

◆本県では小中学校共に、補充指導の実施が少ない。業務の増加や部活動の指導など多忙な状況ではあるが、定着のための補充指導を充実することが課題である。

改善の方向

- 補充指導を行う時間を生み出す日課の工夫を行う。
- 地域の学習支援ボランティアと連携する。
- 諸会合と並行して児童生徒を指導する校内体制の整備。

県教委に期待する取組

- 補充指導の充実に向けた問題の提供。
- 地域と連携した学力向上の取組例の紹介。

3 家庭学習について

課題

- ◆一定時間の家庭学習を行う習慣が身に付いていない児童生徒がみられる。
- 予習、復習や苦手な教科の学習を行う割合が低いこと、授業と関連した家庭学習の内容を充実することが課題である。

改善の方向

- 授業と関連付けた家庭学習の内容への転換を図る。
- 家庭学習を点検する時間を確保する。
- 保護者の協力を得る。併せて、地域の学習支援ボランティアによる家庭学習の点検等も検討する。

県教委に期待する取組

- 授業と関連付けた家庭学習への改善の取組例の紹介。
- 保護者・地域と連携した家庭学習の取組例の紹介。

4 中学生の生活について

課題

- ◆本県の中学生は、他県に比べて起床時間が大変早い。テレビの視聴やゲームに費やす時間、携帯電話等の使い方等は全国と同様の傾向ではあるが、学習に影響を与えている。家庭学習を含めた生活習慣の確立が課題である。

改善の方向

- 朝部活も含めた生活全般の見直しを行う。
- 学力向上の基盤となる生活習慣の確立を図る。
- 携帯電話等の適正な使用についての指導と家庭への啓発を行う。

県教委に期待する取組

- 部活動のあり方についての検討。
- 望ましい生活習慣に関する情報提供。
- 「共育」クローバープランのさらなる推進。
- 情報モラル教育に関する情報の提供。

長野県「全国学力・学習状況調査」分析委員会名簿

委員長	宮崎 樹夫	(信州大学教育学部 教授)
委員	八木雄一郎	(信州大学教育学部 准教授)
	小林 洋子	(長野市立城東小学校 校長)
	尾形 浩	(白馬村立白馬中学校 校長)
	柳澤 隆一	(千曲市立八幡小学校 教諭)
	江口 尚	(飯田市立緑ヶ丘中学校 教諭)
	青木 陽子	(長野市立城東小学校 P T A)
	横内 和子	(信州大学教育学部附属松本中学校 P T A)

<作業部会委員>

白井 富健	(上田市立神科小学校 教諭)
林 尚之	(岡谷市立小井川小学校 教諭)
堀内 勝	(松本市立源池小学校 教諭)
丸山 真弘	(東御市立東部中学校 教諭)
小松 亨	(塩尻市立塩尻西部中学校 教諭)
宮入 勝彦	(小布施町立小布施中学校 教諭)
金井 直樹	(東信教育事務所 指導主事)
大塚 明彦	(東信教育事務所 指導主事)
吉越 秀之	(南信教育事務所 指導主事)
登内 淳	(中信教育事務所 指導主事)
村田 忠久	(北信教育事務所 指導主事)
春日 直史	(総合教育センター 専門主事)



「共育」クローバープラン